

中国新石器時代の玉琮

中 村 慎 一

1. はじめに

新石器時代の中国では各地域、各時代にわたって玉製品の製作・使用が行われていた。その多くは玦、璜、管、珠などといった佩用される装飾品である。ところが、新石器時代後期になると長江下流域をはじめとする各地域で、単なる装飾品の域を越えた玉器が登場するようになる。玉琮、玉璧がそれである。これらの玉器はごく限られた階層の者にのみ付属するという点において、それ以前の玉器から質的に大きく飛躍したものである。土器や石器と異なり、玉器は社会構造の変化を直截に物語る。それゆえに、我々にとってきわめて重要な研究対象となる。また、実用を離れた器物であるという玉器の特性は、玉器自体の形象、あるいはそこに描かれる図像を当時の人々の観念表徴としてとらえることを可能とする。つまり、それらの分析は彼らの精神文化の一端を明らかにする手掛かりを与えてくれるであろう。

本稿でとり上げる玉器は琮である。なぜ璧ではなく琮なのか。その答えは簡単である。玉琮は玉璧に比べてより形態が複雑である、すなわち、より多くの属性を備えているからである。より多くの属性を持つということは、より多くの情報を我々に伝えてくれるということにはほかならない。以下、その編年、分布、機能・用途、製作法などについて検討を加えていくこととする。

2. 良渚文化の玉琮

これまでのところ、新石器時代の玉琮が最も多く発見されているのは長江下流域の良渚文化の諸遺跡からである。したがって、玉琮の分析を行うにあたって、まずこの良渚文化の出土品から始めるのが妥当であろう。

良渚文化というのは、太湖周辺から杭州湾の沿岸にかけて分布する新石器時代後期の文化である。その土器は灰陶または黒皮陶を主体とし、石器としては磨製の有段片刃石斧や扁平石斧が卓越する。そして何よりも、玉製品がきわめて豊富であることをその最大の特色としている。それらの玉器は通常、墓の副葬品として一括して大量に出土するものであり、そうした墓を中国の研究者は“大墓”と呼んでいる。この“大墓”という用語は必ずしも墓葬規模の大小を含意するものではないが、一般に、大量の玉器を出土する墓はその規模においても大きなものが多い（因みに、近年、人工の墳

丘を持つ“大墓”の存在が明らかになってきたが、これについては別稿で論じる予定である)。玉器の種類としては、玉琮、玉璧のほかに各種の装飾品がある。^{文48}

表1は玉琮（琮形管をも含む）の出土が報じられている遺跡の一覧表である。それを地図上にプロットしたものが図1である。良渚文化の分布域に満遍なく分布していることが判る。

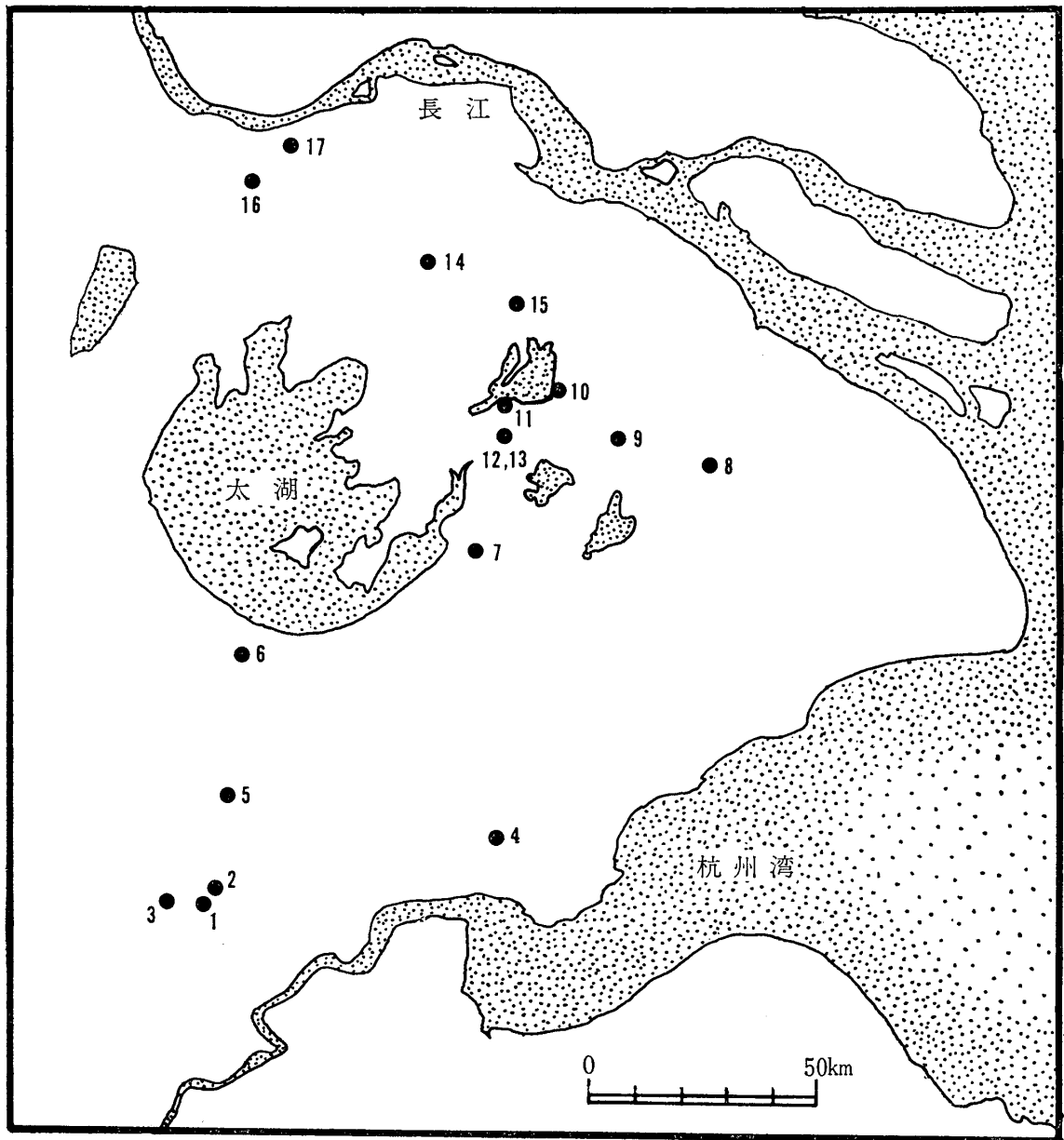


図1 良渚文化の玉琮出土遺跡

- | | | | |
|-------------|-----------|-----------|-----------|
| 1 余杭・反山 | 2 余杭・瑶山 | 3 余杭・吳家埠 | 4 海寧・荷葉地 |
| 5 德清・蟬山 | 6 吳興・楊家山 | 7 吳江・王焰村 | 8 青浦・福泉山 |
| 9 昆山・少卿山 | 10 昆山・綽墩 | 11 吳県・草鞋山 | 12 吳県・張陵山 |
| 13 吳県・張陵山東山 | 14 常熟・嘉菱蕩 | 15 常熟・黄土山 | 16 武進・寺墩 |
| 17 江陰・高城墩 | | | |

○玉琮の編年

表1を見て判るように、玉琮の出土点数が多いのは反山遺跡、瑤山遺跡、福泉山遺跡、寺墩遺跡の4遺跡である。したがって、玉琮の編年を行うに際しては、この4遺跡の資料を中心に見ていくこととなる。

	遺 跡 名	遺 跡 種 別	出 土 点 数	文 献 番 号	備 考
1	浙江・余杭・反山	墓 葬	21	文34, 36	
2	浙江・余杭・瑤山	〃	27	文35, 75	
3	浙江・余杭・吳家埠	不 明	?	文70	発掘報告未刊
4	浙江・海寧・荷葉地	墓 葬	?		〃
5	浙江・徳清・蟬山	不 明	?		〃
6	浙江・吳興・楊家山	不 明	?	文33	〃
7	浙江・吳江・王焰村	デポ ?	1	文15	
8	上海・青浦・福泉山	墓 葬	11	文16, 24, 25, 26	
9	江蘇・昆山・少卿山	〃	2	文37	
10	江蘇・昆山・綽墩	〃	1	文61	
11	江蘇・吳県・草鞋山	〃	6	文51	
12	江蘇・吳県・張陵山	〃	3	文56	
13	江蘇・吳県・張陵山東山	墓葬 ?	3	文63	
14	江蘇・常熟・嘉菱蕩	墓 葬	1	文21	
15	江蘇・常熟・黄土山	〃	1	文21	琮形管のみ
16	江蘇・武進・寺墩	〃	35	文53, 58	他に20点採集
17	江蘇・江陰・高城墩	?	?		発掘報告未刊

表1 良渚文化の玉琮出土遺跡（出土点数は黄土山を除き琮のみの点数）

（以下、各遺跡に関する記述および図版の出典は、^{注1}特に記載のない限り、上記の各報告文によるものとする）

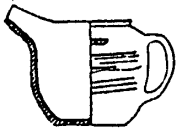
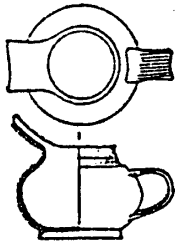
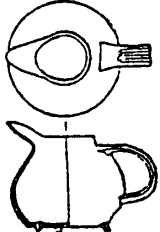
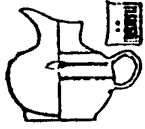
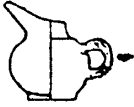
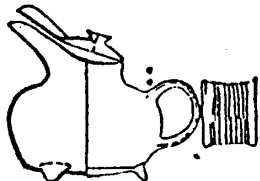

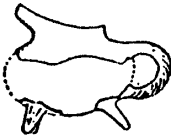
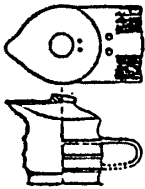



第 一 期	 1		
第 二 期	 2	 3	
第 三 期	 4	 5	 6
第 四 期	 7		 8
第 五 期	 9	 10	 11
	 12		

図 2 注口土器の変遷

- | | | | |
|-----------------|------------------|-----------------|-----------------|
| 1 張陵山M 3 | 2 越城M 3
文55 | 3 越城M 6 | 4, 6 福泉山T 27M 2 |
| 5 雀幕橋M 1
文32 | 7, 8 福泉山T 22M 5 | 9 王家山H 1
文43 | 10 福泉山T 23M 2 |
| 11 福泉山T 15M 3 | 12 広富林M 1
文23 | (縮尺 1/10) | |

これまでに玉琮の編年はいくつか試みられている。しかし、いずれも反山、瑤山、福泉山等の主要遺跡の報告が刊行される以前の^{文4, 22, 29}のものであり、不備な点が少なくない。ただし、断面の形状が時代を追って円形から正方形へと変化するという^{文4, 22, 29}こと、あるいは、幅に比べて高さの高いものは後の時期になってから現れるということなどは、大筋においては正しい見通しであったと言える。ところで、玉琮の編年を構築しようとする場合、玉琮そのものの文様や形態のみからアプローチするだけでは不十分であることは言うまでもない。共伴する遺物の相対的年代観や玉琮を出土する墓葬同士の切り合い関係などをも考慮に入れて初めて、考古学的に十分な説得力を持った議論を展開することができよう。良渚文化の玉琮の場合もまたしかりである。ただし残念なことに、良渚文化に関しては、玉琮を出土する墓葬同士の切り合い関係が^{注2}今までのところ報告されておらず、したがって、もっぱら共伴する遺物の相対的年代観を頼りに編年を進めていかなければならない。

ここで注目するのが一種の注口付き土器である。盃、匜、壺、杯などと報告書ごとにその呼称は異なるが、一つの注ぎ口とそれに対向する位置に一つの把手を持つ同一の器種であるので、ここでは混乱を避けるために一括して注口土器と呼ぶことにする。^{注3}

ところで、良渚文化の最も早い時期に位置づけられるのは張陵山遺跡上層を標準とする遺物群、いわゆる良渚文化張陵山期の遺物群である。缸、罐、瓶、そしてある種の壺などの形態に崧沢文化崧沢Ⅱ期からの明確な連続性が認められる一方、貫耳壺や魚鱗形の足を持つ鼎など良渚文化の指標となる器種が出現しており、紛れもなく良渚文化の範疇に含まれるものである。この時期に注口土器は平底の器形をとって出現する（図 2—1）。同じく張陵山期に属する越城遺跡上層からの出土品には底部に低い圈足の付くもの（図 2—2）と小さな三足の付くもの（図 2—3）とがある。いずれも平底のものに比べて時期的には若干遅れるものであろう。その後の変遷は福泉山遺跡出土の諸例に明確に見て取ることができる。まず頸部がすぼまり、注ぎ口は上に伸びる。把手の幅が広くなり、その付け根には二つの小孔が穿たれる。底部の形状にはやはり低圈足の付くもの（図 2—4）と小三足の付くもの（図 2—6）の2種がある。撚紐状の把手を持つ例品（図 2—5）もあるが、他の部分の形態から見て時期的に併行するものであろう。つづいて、圈足を持つものは胴部のふくらみが弱くなり（図 2—7）、三足を持つものはその三足が伸びてくる（図 2—8）。そしてさらに、圈足器では胴部のふくらみはますます乏しくなり、逆に把手の幅は胴部直径と同じほどに広くなる（図 2—9, 10, 11）。ただし、高さに関してはバリエーションがある。三足器では足がより長くなり、開口部がすぼまる（図 2—12）。

以上見たように、注口土器はきわめてスムーズにその器形変遷の跡を追うことが可能である。現在のところ、この注口土器を措いて他に良渚文化の細分にこれほどまでに有効な器物は見当たらない。その変遷の経過は五つの小期に区分しうる。

つぎに、この注口土器の変遷に依拠しつつ玉琮の編年にとりかかることとする。それに先立ち、以下の記述の便を図り、用語の取り決めをしておきたい。良渚文化の玉琮ではその外壁面に人あるいは獣の顔面をシンボライズした文様が描かれることが普通である。そのうち小さな丸い目を持つ

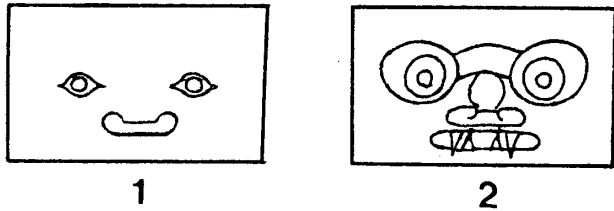


図3 玉器に描かれるシンボル
1 シンボルA 2 シンボルB

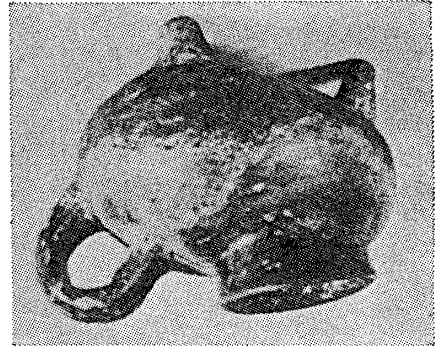


図4 福泉山遺跡T. A. M. 6
出土注口土器

ものをシンボルA, 大きな卵形の目を持つものをシンボルBと呼ぶこととする(図3)。また, 玉琮の編年ではその断面の形状がきわめて重要な決め手の一つになるのであるが, 以下の記述に「断面」という場合は画面の上の突出部分のそれを指すものとする。つまり, 玉琮を俯瞰して“内円外方”という場合の“内円”の部分である。さらに, 第一期, 第二期……と漢数字を用いて表記される時期はいずれも注口土器編年の各期を指すものとする。

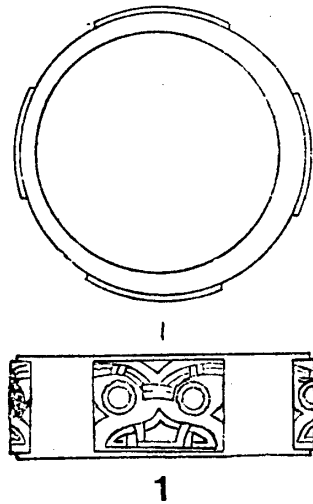


図5 張陵山遺跡M. 4出土玉琮(縮尺 1/3)

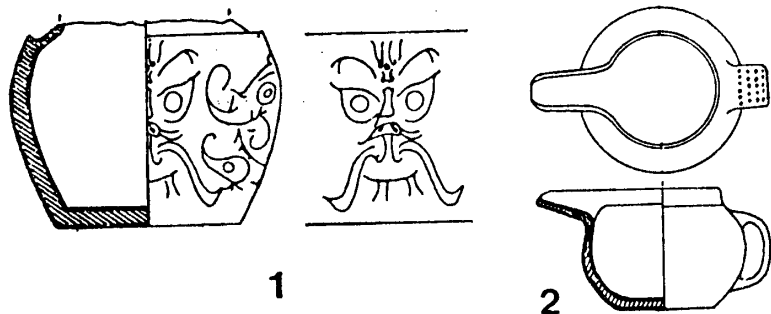
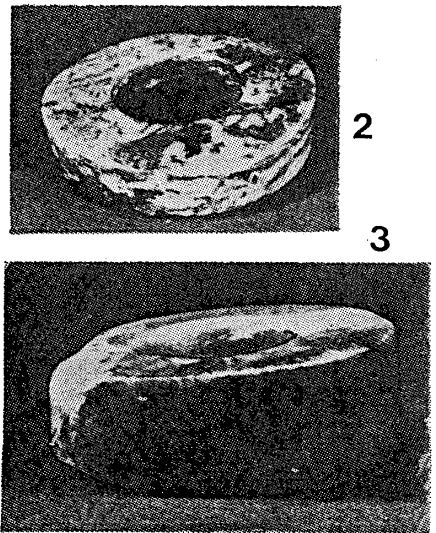


図6 澄湖古井出土土器(縮尺不同)

まず, 第一期の張陵山遺跡M. 4出土品(図5—1)が良渚文化最古の玉琮として位置づけられる。断面は円形で概形は腕環に似るが, 直径が10cmとあまり大きくかなり重量感もあり, 常時佩用したものであるかどうかは疑わしい。外側面に四つの長方形の画面を作り出し, そこに上下一対づつの牙を剥きだした口

と大きく見開いた両眼とを持つシンボルBが描かれている。瞳は二重円で表され、そのまわりを（部分的には切れているものの）卵形の線がとり囲んでいる。上唇の中央が上方に切れ上がり兎唇状を呈している。全体的に見て大胆、素朴な印象を与える。澄湖古井出土の罐（報告者によって第一期の注口土器（図6—2）と同時期のものとされている）外壁面に描かれる図像（図6—1）に近いものである。なお、汪遵国氏は原報告に「玉琰」と分類される2点の玉器をも玉琮として分類しなおし、その写真を紹介している。ともに無文で、小型で厚みのある璧といった趣のものである（図5—2, 3）。

第二期の注口土器と直接の共伴関係を有する玉琮は現在までのところ知られていない。

第三期の注口土器（図4）^{注5}と同一の墓から出土しているのが図7—1, 2である。いずれも断面形は正円に近い隅丸正方形である。その隅丸の角の部分に長方形の画面を作り出し、上下二段にA, B二種類のシンボルを描き分ける。シンボルAの両眼の上には鉢巻きのような二本の横帯が付けられている。拓本が不鮮明ではっきりとしないが、シンボルAの円形の眼の両側には目頭、目尻を表す刻みが施されているようである。このうち、図7—1の玉琮では顔面の各部分が微細線で埋めつくされる。さらに、シンボルの両脇に鳥文が描かれていることは特に注目すべき点であり、この特徴は後に反山、瑤山両遺跡の例品との比較を行う際に一つの有力な手掛かりを与えてくれる。

第四期に属するのが図7—3, 4である。やはりA, B二種類のシンボルを上下二段に描く。シンボルAの両眼には目尻、目頭を表す刻みが付けられる。図7—3の例品では、棒状に表されたシンボルAの鼻とシンボルBの口のみが細線で充填されている。断面の形状は正円からやや離れ、正方形により近づいている。

そして最後の第五期に当たるのが図7—5, 6に載せる2例である。ともに刻みのない小さな二つの眼と棒状の鼻とを持つシンボルAのみが三段に描かれている。断面形はほぼ正方形に近い。

このように、注口土器の器形変遷に基づくことによって、おおまかなながらも玉琮の編年のアウトラインを描くことができた。つぎに、注口土器の存在していない、あるいは存在しているとしてもそれが報告されていない遺跡から出土した玉琮について見ていくこととしよう。ここではもっぱら玉琮自体の型式学的検討から議論を進めていくことになる。

先に第三期に当たる福泉山遺跡T4M6の玉琮でシンボルを挟むように鳥文が描かれていることに着目しておいた。これと同様の構成をもつのが反山遺跡M12出土品である（図8—1）。射径（円形突出部の直径）17.1—17.6cm、高さ8.8cm、重さ6.5kgという大きさを誇っている。文様の彫刻もきわめて繊細・緻密で良渚文化の玉琮中最高の傑作と言える。報告者が「琮王」と称する所以である。低い円柱状の器体には四つの画面が設けられ、それは中央で鈍角に折れ、その稜線を正中線としてシンボルA, Bが上下二段で一組となり、それが二組描かれる。下段のシンボルBの両脇には鳥文が配されている。この玉琮でとりわけ目立つことは、四枚の画面の間の地の部分にやや複雑な構成からなるシンボルBが描かれていることである。卵形の両眼とそれを繋ぐ帯、その下には鼻、そして牙を剥き出した口という配置である。牙は内側の二本が上向き、外側の二本が下向きとなっ

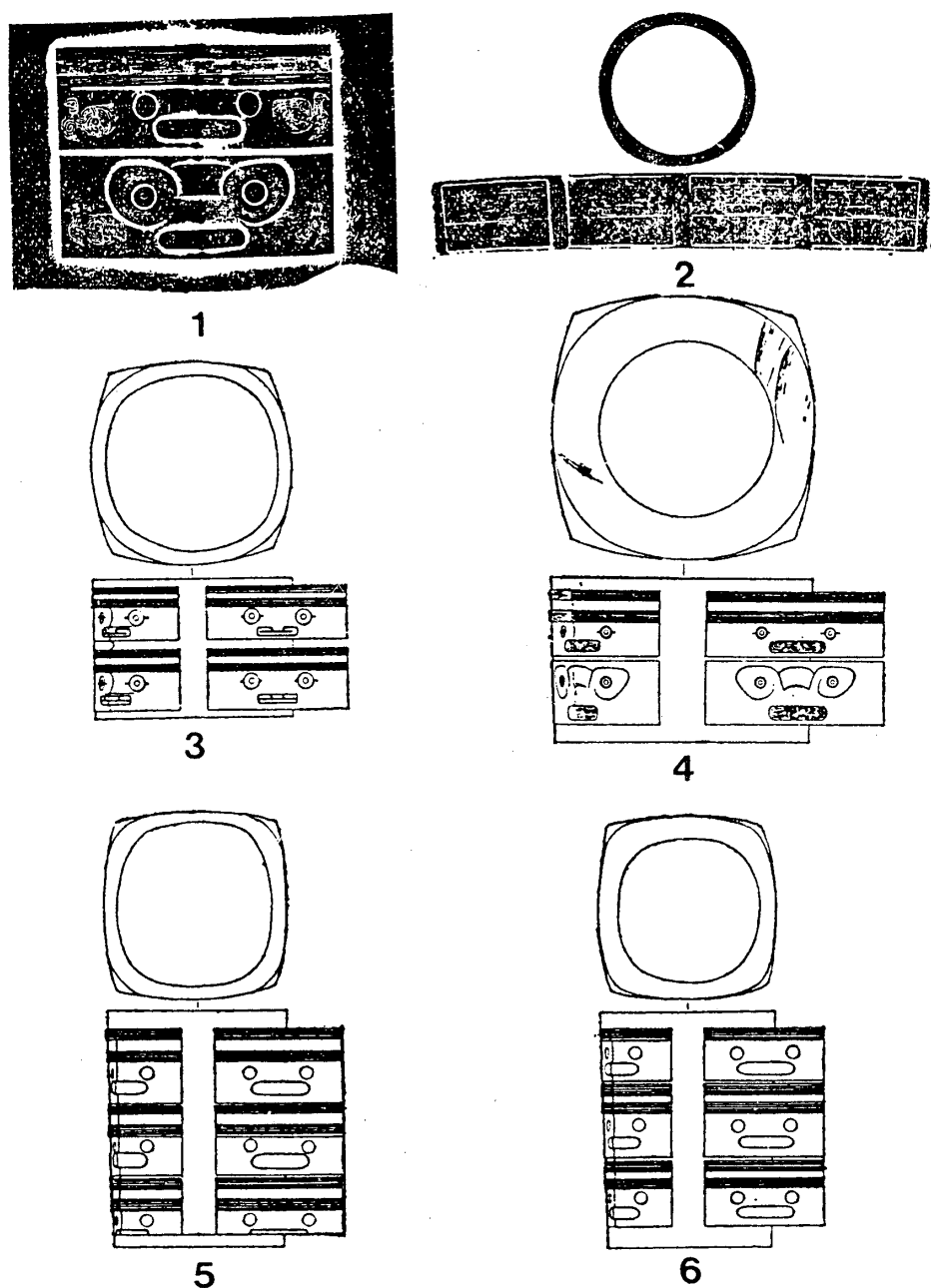


図7 福泉山遺跡出土玉琮（縮尺 1/3）

1, 2 T 4 M 6

3, 4 T 22 M 5

5, 6 T 15 M 3

ており張陵山遺跡M4のものと同じである。そしてこの顔の図像を抱きかかえるようにして大きな羽飾^{注7}りを頭に被った人物像が描かれている。人物像の顔はシンボルAで表される。このシンボルAには鼻と口が備わっており、口には歯までが表現されている。手には指があり人間のそれを模しているが、左右の足先は三本の鉤爪となり鳥類のそれに擬するが如くである。微細な線で陰刻された体軀の部分は遠目に見たかぎりでは見落してしまいかねない。その分、浮き彫りにされている、羽飾りを被るシンボルAとその下のシンボルBの顔の造作の部分が目立つこととなる。上にシンボル

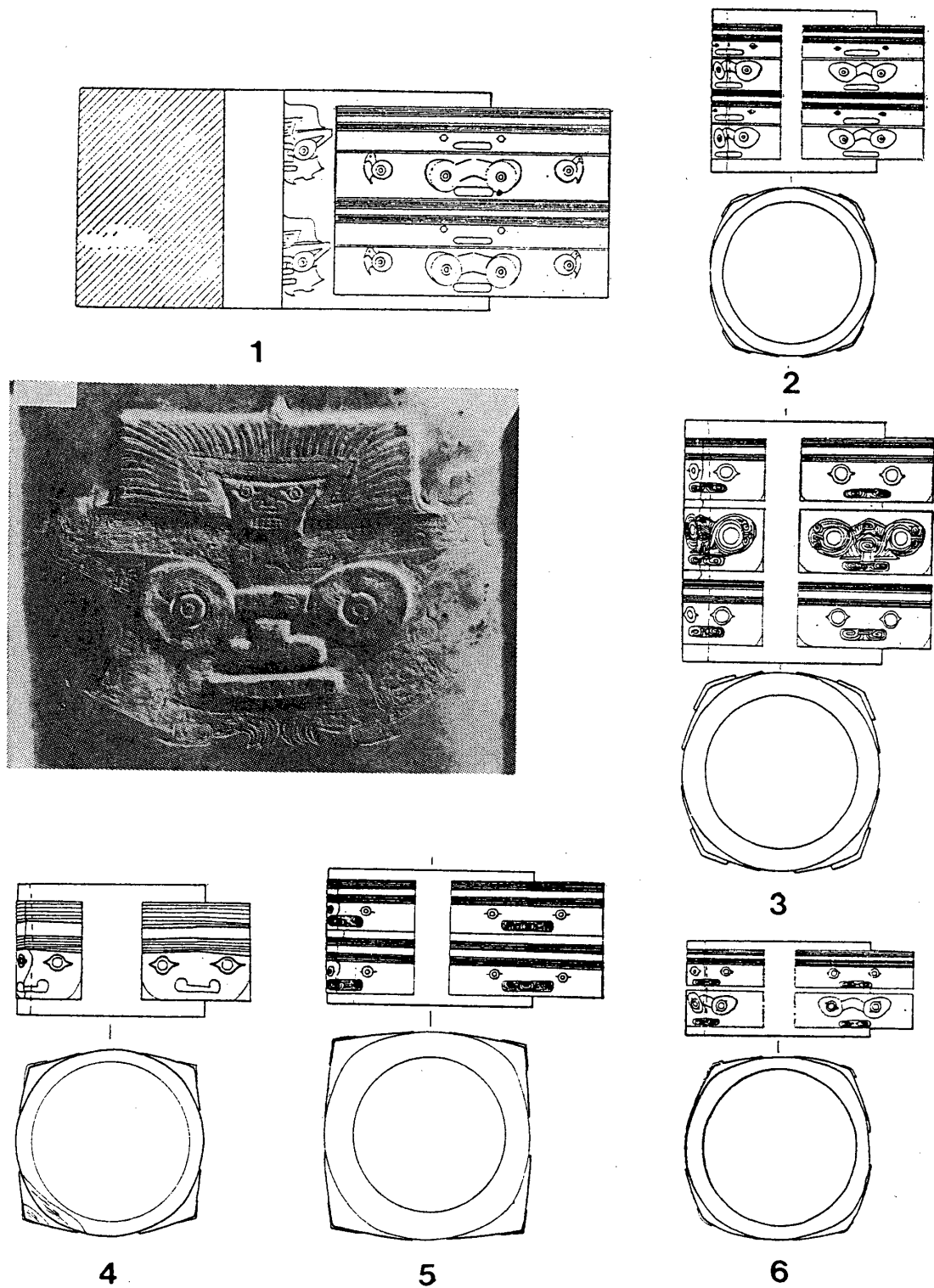


図8 反山遺跡出土玉琮 (縮尺 1/3)

1~3 M12

4 M16

5 M14

6 M18

A, 下にシンボルBという, 初期の玉琮にしばしば見られる図案構成の起源はどうやらここにありそうである。そうであるとすれば, シンボルAの二本の鉢巻は羽飾りの簡略化したものと見ることができよう。おそらく, 上の一本を羽の部分, 下の一本を羽を束ねる帯の部分に準えているのであろう。

ここで話題を鳥文に戻そう。この玉琮の鳥文は, 目玉のような胴体と大きな嘴の突き出た顔のみが表されている。福泉山遺跡T 4 M 6出土のそれに比べて縮こまった形に描かれているわけである。この表現法の違いは時期差を反映したものである(鳥文の変遷については後に詳述する)。そしてその時期差とは, 反山遺跡M12出土品が古く, 福泉山遺跡T 4 M 6出土品が新しいということである。なぜならば, 後者の断面形は正円に近いながらも隅丸であったのに対し, 前者のそれは完全な正円であるからである。^{注8}正円形から正方形へという断面形の時代的变化は先に見たとおりである。それでは張陵山遺跡M 4出土品との前後関係はどうであろうか。結論的に言って, やはり張陵山遺跡M 4出土品のほうが時代的に遡ると考えられる。というのは, 張陵山遺跡M 4出土品の画面は平板であるのに対して, 反山遺跡M12出土品のそれは中央に稜線を持って突出しているからである。つまり, 反山遺跡M12出土品は, 張陵山遺跡M 4出土品よりも新しく福泉山遺跡T 4 M 6出土品よりは古いということになる。注口土器との直接の共伴関係を有しないので厳密に断定することはできないが, 一応さきほど空白になっていた第二期に相当するものと考えておく。

ところで, 反山遺跡M12ではほかにも図8—2, 3に掲げた玉琮が出土している。いずれも断面形は正円形である。断面形が正円形である点ではM16出土の玉琮も同様である(図8—4)。シンボルAのみを描出している。眼の下に位置する両端が膨らんだ棒状のものが口ではなく鼻であることは, M12出土品に描かれるシンボルAの表現法(盛り上がった曲線で小鼻を表現する)からの連続性として了解できる。画面両下端に斜線を入れるのは頬の線を区画したものであろう。M12出土品(図8—3)にも見られる手法である。反山遺跡M14, M18出土品(図8—5, 6)は断面の形状がやや角張ってきており, 福泉山遺跡T 4 M 6出土品に相当する時期, すなわち第三期のものであることが判る。

次に, 瑤山遺跡出土の諸例を見ていくこととする。まず特筆すべきことに, 瑤山遺跡には張陵山遺跡M 4出土品と時代的に併行すると思われる例品が存在している。図9—3に掲げるM 9出土品がそれである。腕環に似た肉薄の玉器の外表面に長方形の画面を四面つくり出している。それは稜線を持つように突起してはいない。描かれるシンボルはシンボルBであり, この点も張陵山遺跡M 4出土品と同じである。ただし, 瑤山遺跡M 9出土品では鼻柱と小鼻からなる鼻の表現が見られ, 口唇も兔唇状にはなっていない。また, 画面全体に細線をもって幾何学形の文様を刻みだしている。このような違いは認められるものの, 時期的な併行関係は間違いないところである。他の墓葬出土の例品はいずれも反山遺跡出土品に時期的に併行するものである。シンボルの表現法や断面の形状から見て, M 7出土品(図9—2)は第二期に, M 2出土品(図9—1)は第三期にそれぞれ位置づけられよう。問題となるのはM10およびM12出土品(図9—4~10)である。僅かながら断面形が角張りかけているものが若干あるものの, 画面を細線で充填する, あるいはシンボルBの鼻柱

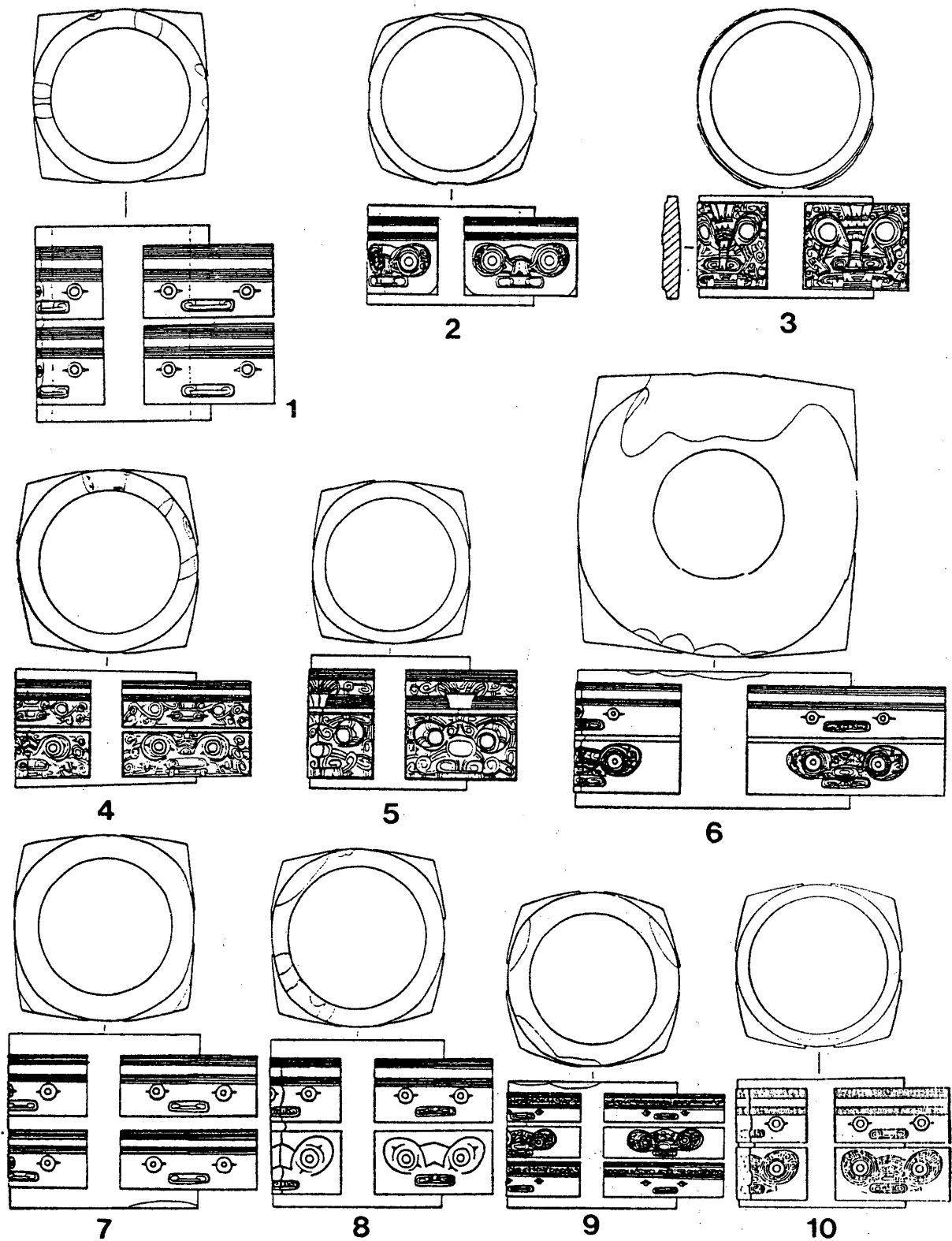


図9 瑤山遺跡出土玉琮 (縮尺 1/3)

1 M2

2 M7

3 M9

4 M10

5~10 M12

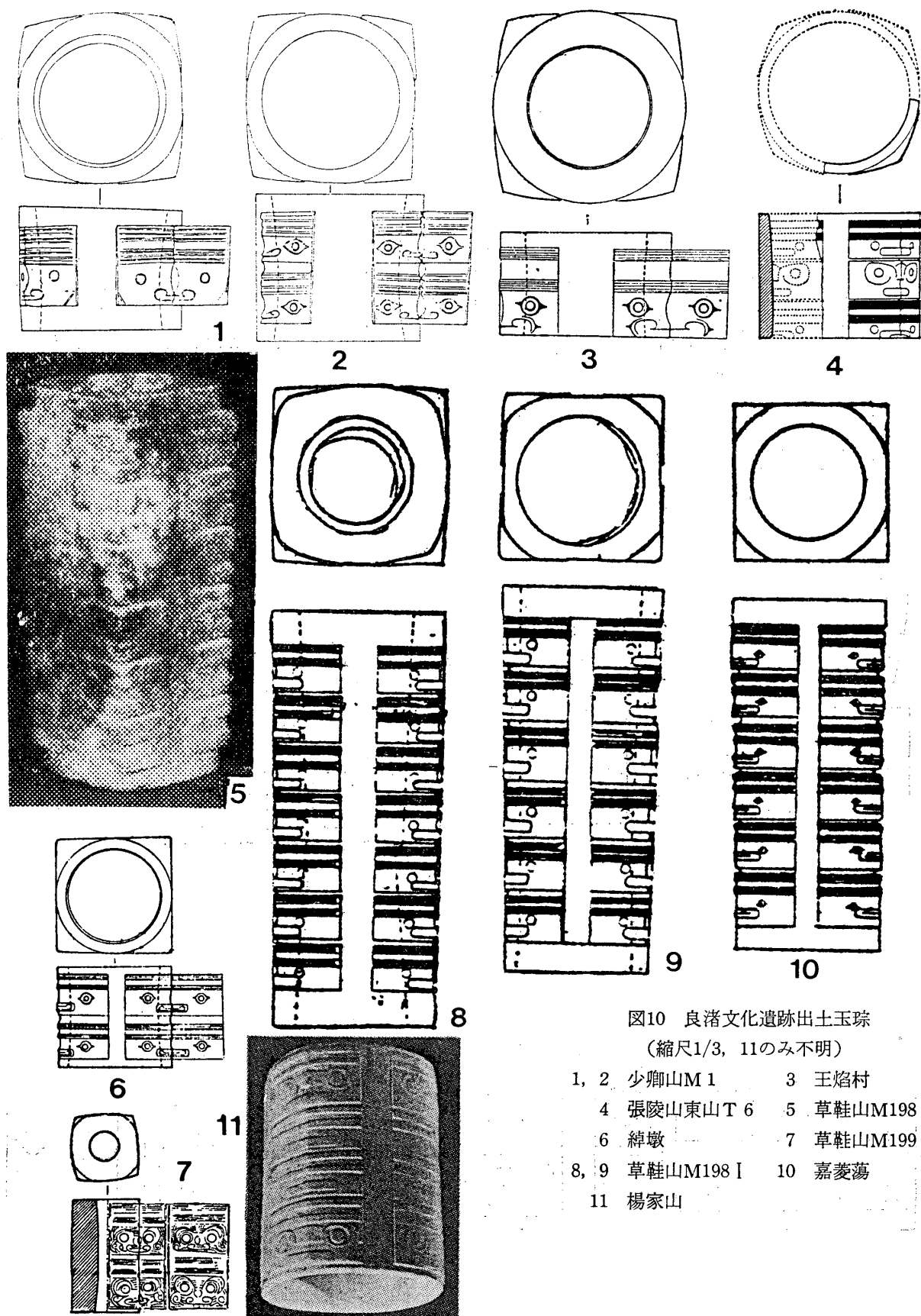


図10 良渚文化遺跡出土玉琮
(縮尺1/3, 11のみ不明)

- | | |
|----------------|--------------|
| 1, 2 少卿山M 1 | 3 王焰村 |
| 4 張陵山東山T 6 | 5 草鞋山M198 II |
| 6 綽墩 | 7 草鞋山M199 |
| 8, 9 草鞋山M198 I | 10 嘉菱蕩 |
| 11 楊家山 | |

を表現しているという、第三期以降には見られない古い要素を残しており、第三期に繰り入れることはできない。しかし一方、鼻柱の表現が梯形ではなく横長の円の形をとっており、反山遺跡M12、瑤山遺跡M7出土品などよりもいくぶんかは時期的に降るものと見なさざるをえない。そこで苦肉の策ではあるが、先に第二期とした反山遺跡M12、M16瑤山遺跡M7を第二期前段に、この瑤山遺跡M10、M12を第二期後段に区分することにする。ところで、画面を微細線で満たすという古い時期の特徴を保持する2点の玉琮（図9—4、5）は注目に値する。M10出土品では上段に描かれたシンボルAが渦巻き状の繁縷な文様で構成されており、M12出土品では上段にシンボルAが正確に描かれないかわりに二本の鉢巻きの下の一本を区切って逆梯形が挿入されている。おそらくこれは反山遺跡M12出土品に見る体軀を備えたシンボルBの顔の部分が残存したものであろう。上段に描かれるシンボルAの由来を暗示するものである。

少卿山遺跡出土品にはシンボルのみを描くもの（図10—1）がある。断面形が正円であること、棒状の両端を膨らませて小鼻を表現すること、頬を区画する線があることなどから第二期前段に位置づけられる。目頭、目尻を表す刻みがないことは例外的であるが、同時に出土している他の1点（図10—2）にはそれが明確に表現されている。

王焰村遺跡出土品（図10—3）も頬の線はないものの、眼・鼻の表現法から見て、やはり第二期前段のものと考えることができる。

張陵山東山遺跡は張陵山遺跡（正確には張陵山西山遺跡）に隣接する土墩遺跡である。2点の琮形管と1点の玉琮が出土している。琮形管はM1からの出土品であるが、玉琮はそのM1から東へ20m余り隔たったT6発掘区から出土したものである。発掘の時点では確認されなかったようであるが、そこにも墓葬が存在していたに違いない。このT6出土の玉琮は全体の四分の一ほどしか残存しておらず、他の部分は未発見である。埋納時にすでに破片であったということは考えにくいことから、この墓は後世の攪乱をうけている可能性が大きい。この玉琮（図10—4）には上・中・下三段にシンボルA・B・Aが描かれている。同様の構成は反山遺跡M12出土品、瑤山遺跡M12出土品に見られる。実測図や拓本で見ると、かなり文様の簡略化が進んだものと思われるが、報告書の記載に「中間の一節は精細な獣面文である」とあるので、実物は細線で幾何学文様を充填するようなものであるのかも知れない。第二期後段の遺物と考えておく。

綽墩遺跡出土品（図10—6）はシンボルAを二段に描く構成をとっている。眼・鼻の表現や断面形から見て、瑤山遺跡M2出土品にもっとも近く、第三期に位置づけられる遺物である。

草鞋山遺跡M199（原報告のT303M1）出土品（図10—7）はシンボルBが二段に描かれ、かつまたシンボルBの額にはそれぞれ二本の鉢巻きを取り巻いているというきわめて特異なものである。このような図案構成は他に類を見ない。鼻柱が楕円で表現されることから第二期後段に属するものと考えられる。

草鞋山遺跡M198は墓葬の構造自体がかなり複雑である（図11）。一つの墓壙内に三つの遺物集の部分が存在する（それをクラスターⅠ、Ⅱ、Ⅲと呼ぶことにする）。僅かながらも残存していた人

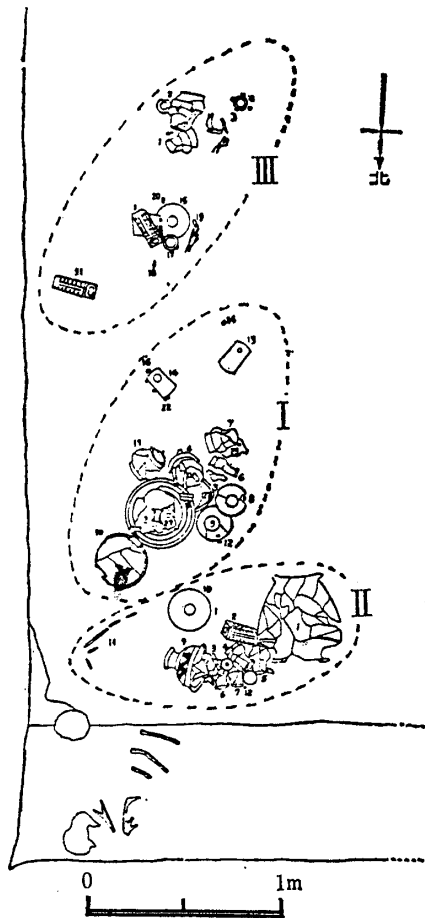


図11 草鞋山遺跡M198平面図

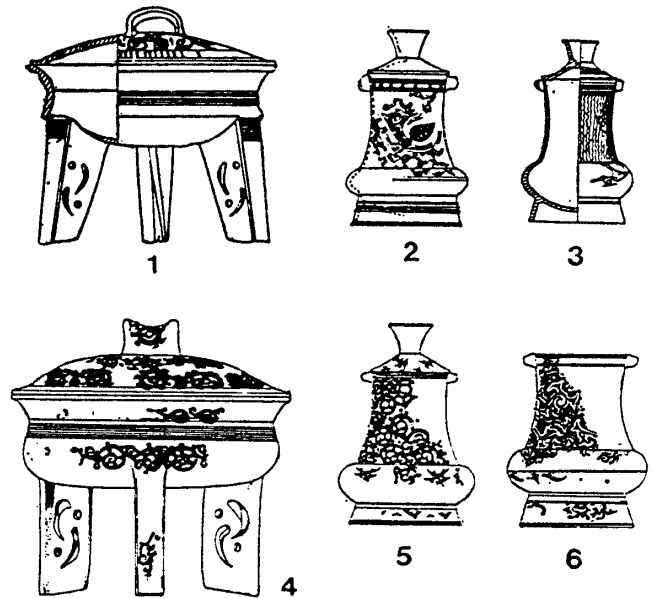


図12 草鞋山遺跡，福泉山遺跡出土土器
(縮尺 1/8)

- | | |
|-------------|-----------------|
| 1 草鞋山M198 I | 2, 3 草鞋山M198 II |
| 4 福泉山T22M 5 | 5, 6 福泉山T27M 2 |

骨との関係から報告者は、伸展葬の主体者（Ⅰ）に2体の集骨葬（Ⅱ，Ⅲ）が伴うものと解釈している。ということは、主体者が埋葬される際に、すでにそれ以前に死亡しており他の場所に仮埋葬され、少なくとも軟部は腐朽していた2体の遺骨をあらためて一緒に葬った、ということになる。つまり、クラスターⅠの被葬者とクラスターⅡ，Ⅲの被葬者では死亡時期に差があったということになる。もっとも、その時間差が数週間、数カ月であったのか、数年、数十年であったのかまでは推し量ることはできない。さらに、各クラスターの遺物はそれぞれの死者が初めに埋葬された際に副葬されたもののようである。なぜならば、クラスターⅠに含まれる蓋付きの鼎（図12—1）は福泉山遺跡 T22M 5 出土品（図12—4）と相同のものであり、クラスターⅡに含まれる貫耳壺（図12—2，3）は福泉山遺跡 T27M 2 出土品（図12—5，6）と相同であるからである。先に見たように、共伴する注口土器から、福泉山遺跡 T22M 5 は第四期，T27M 2 は第三期に位置づけられる。

さて、本題の玉琮に戻ろう。クラスターⅡの玉琮（図10—5）は複節・柱状のもので、第三期の玉琮としては例外的なものである。不鮮明な写真が掲載されているのみで文様の細かな点が明らかにできないことが残念である。クラスターⅠの玉琮（図10—8，9）も複節・柱状のもので、第四

期の例品としては文様の簡略化が進んでいる。

嘉菱蕩遺跡出土品（図10—10）は草鞋山遺跡M198 Iの玉琮に類似したものである。こちらの方が眼鼻の表現に古形を残しているとは言え、やはり第四期のものとするのが妥当であろう。

楊家山遺跡出土品（図10—11）は上から下にシンボルB、A、A、Bと4節に2種類のシンボルが描かれ、そのいずれもが額に鉢巻きを巻いているというきわめて特異な例品である。文様の簡略化の程度から見て、やはり第四期に属するものといえる。

寺墩遺跡では3基の墓葬から計35点の玉琮が出土している。そのうち最古のものがM4出土品（図14—1）である。シンボルA、Bを上下二段に描いている。顔面の各部ばかりかシンボルAの二本の鉢巻きの間にまで細線を描き込んでいる。さらに、両シンボルの両側、こめかみから顎にかけて曲尺状に区画を設け、そこにも細線を充填している。斜線で頬を区切る手法に類似する。断面形が正円形であることも相まって、比較的早い時期のものであることは一目瞭然である。鼻柱が楕円形で表現されることから第二期後段に属するものであると位置づけられる。M3出土の諸例（図14—4～8）は全体的に見た印象としては草鞋山遺跡M198 I出土品との類似が感じられるが、文様の簡略化がより進展して目玉が描かれなくなったものが見られること、また、長条化の傾向もより進んでいることから、草鞋山遺跡M198 Iよりも遅れる時期、すなわち第五期に相当するものと見なすのが適当である。この推定は共伴土器の比較からも首肯される。寺墩遺跡M4出土の豆と簋（図13—1, 2）はいずれも福泉山遺跡T15 M3出土のそれら（図13—3, 4）と相似のものである。この玉琮には15節で高さ33.5cm, 13節で高さ36.1cmという長大なものも見られる。玉琮の発達クライマックスを見る思いがする。M1からも2点の玉琮が出土しているが（図14—2, 3）、ともにM3出土品と同時期のものである。なお、寺墩遺跡ではこのほかにも20点以上の玉琮が採集されている。採集地点にも元来墓葬が存在したと考えるべきであろう。

以上がこれまでに考古学的に発掘され報告された良渚文化玉琮の編年である。ここであらためてシンボルA、シンボルBおよび鳥文の変遷について整理して、編年作業の結びとしよう。

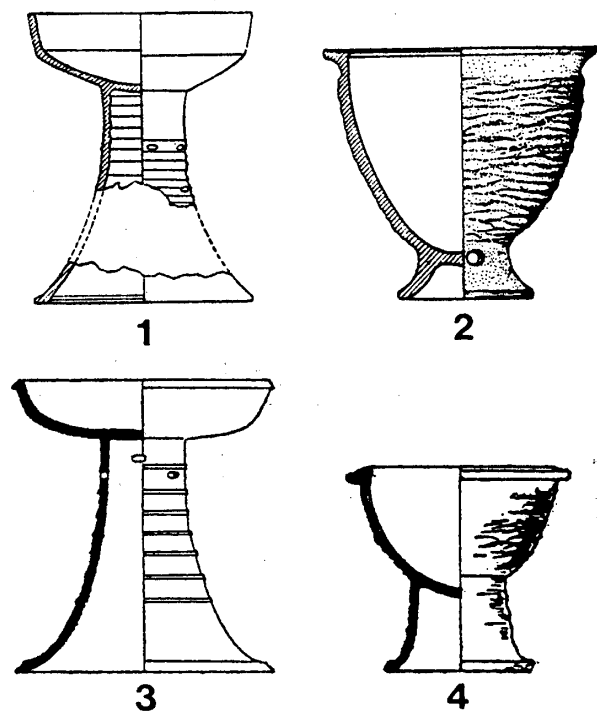


図13 寺墩遺跡、福泉山遺跡出土土器（縮尺 1/6）

1, 2 寺墩M4 3, 4 福泉山T15M3

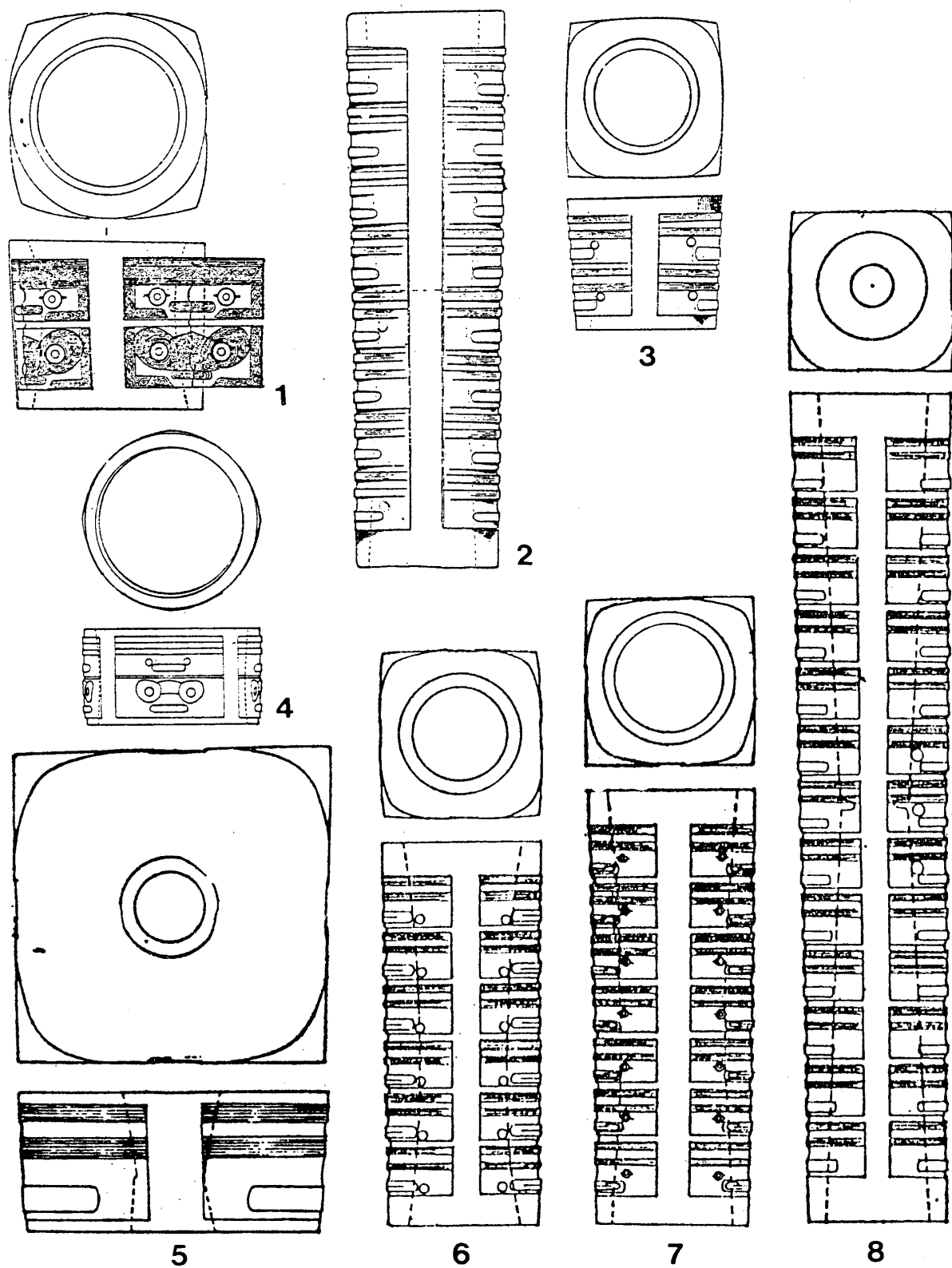


図14 寺墩遺跡出土玉琮 (縮尺 1/3)

1 M4 2, 3 M1 4~8 M3

まずシンボルAである。シンボルAの初現は第一期の瑤山遺跡M9出土小玉琮（図20—2）に見られる。眼には目頭、目尻の刻みがある。鼻の部分が盛り上がるように彫り出されており、棒状の杵の両端を膨らませることによって小鼻を表現している。額には二本の鉢巻き状の帯が横走り、そこには平行する細線が彫り込まれる。第二期前段に属する反山遺跡M12出土玉琮では羽飾りを被った人物像の顔として逆梯形の杵組みの中に登場している。この図像では鼻柱と小鼻がともに表現されているほか、歯の並んだ口までが描き出されている。同遺跡M16出土品では頬を区画する線が彫り込まれている。また同遺跡M12出土品では棒状の杵内の両端に渦巻きを描き込むことで小鼻を表す手法もすでに出現している。第二期後段の例品である瑤山遺跡M10、M12出土の例では眼の表現は基本的に第一期のそれを踏襲しているが、鼻の表現には変化が生じており、棒状の杵の両端を膨らませて小鼻を表現することはすでに見られなくなる。やや特異な例として瑤山遺跡M10出土品を挙げることができるが、ここでは目頭、目尻から巻き髭状の文様がのびている。第三期の諸例では前期からの大きな変化は認められない。第四期になると、それ以前からの形象をそのまま受け継ぐものが残る一方で、草鞋山遺跡M198 I 出土品のような複節・柱状の玉琮では、目頭、目尻の刻みや小鼻を表す曲線が省略されたものが一般的となる。そして最終的に第五期の段階で文様の簡略化はより一層進行し、目玉さえ省略されるようになるのである。

シンボルBはまず第一期に腕環状の玉琮あるいは柱形飾（図25—3，4）に刻み込まれる図像として登場する。大きく見開いた卵形の眼、両眼の間を橋梁状に結ぶ帯、上下各一对の牙を剥き出した口という造作である。第二期の前段にシンボルBを抱きかかえるように描かれた人物像が出現する。シンボルB自体の構図は第一期のそれを継承するものである。それと同時に、口の表現が省略された図像もすでに現れている。シンボルAの場合と同様、頬の区画線を持つものがあるのはこの時期に限って見られる特徴である。鼻柱は梯形で描かれる。いわゆる鼻筋のとおった鼻である。第二期後段になると鼻柱の部分を長円形に表現するようになる。いわゆる団子鼻である。顔の各部分を細線で満たす手法もこの時期までは一般的なものである。この細線充填の手法は第三期の福泉山遺跡T4M6出土品を最後に見られなくなる。鼻柱の喪失と期を一にする現象である。このT4M6からは張明華氏^{文44}によって斧の柄の部分と復元されている象牙器破片が出土しており、そこにもシンボルBが描かれている（図15）。大きく剥き出した牙や眼の虹彩の表現に古相を残している。第四期に属する玉琮では、長条化の傾向に伴ってシンボルB自体描かれることが少なくなる。その少ない例品の一つである福泉山遺跡T22M5出土品では、棒状の杵の両端に渦巻きを描くことで小鼻の表現としている。そして最終的に第五期に入ると、小鼻の表現さえ失われ、ただの杵だけが残され、あたかも口であるかのように見えるものとなっている。ところで、シンボルBと組み合わせられた体軀を持つ図像は玉琮以外の器物にもしばしば描かれるものであり、むしろその場合により後の時期にまで古形を留めている。ここでしばらく玉琮から離れて、各種器物に描かれるその図像の変遷の跡を追ってみることにしよう。

体軀を備えたシンボルBには大きく分けて2種類ある。一つは羽飾りを頭に被った顔を持つタイ

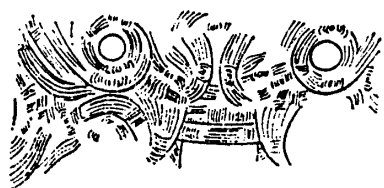
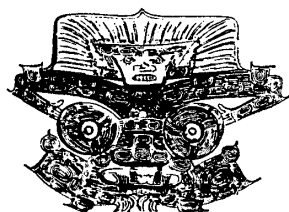


図15 福泉山遺跡T4M6
出土象牙器の文様（縮尺 1/2）

プであり、もう一つはそれを持たないタイプである。前者は反山遺跡M12出土の玉琮に描かれたもの（図16—1）を初現とする。これは左右の肩の線まで引き上げた腕と鉤爪を持った足の両方を備えており、もっとも完整な図像となっている。それに次ぐのが反山遺跡M22出土の玉璜に描かれるもの（図16—2）である。腕の部分が翼のように変化している。両脚の部分は玉器自体の劣化が激しく彫刻がかすれてしまっている。いずれにしてもここには牙を持った口が描かれるはずである。なお、足

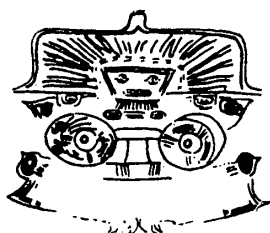
先に鉤爪があることに違いはない。さらにそれに続くのが瑤山遺跡M2出土の冠状玉器に描かれるもの（図16—3）である。本来の両腕の部分は完全に翼に変化し、鉤爪を持った足も消失している。因みに、この墓からは第三期相当の玉琮が出土している。反山遺跡M12出土品は第二期前段に位置づけられるのであるから、両者の中間に位置する反山遺跡M22出土品は第二期後段に置かれることとなる。ところで、腕から翼へという変化の背景には、ここに描かれる人物像が鳥の形をとって現れる神、あるいは神の使者としての鳥である、といった観念が存在していたに相違ない。だからこそ頭には鳥の羽飾りを付け、足先には鳥の鉤爪を備えているのである。そして、実際に鳥の姿を装った司祭（それは政治的にも神聖王として君臨する首長であったであろう）が祭儀を実修するという現実が存在していたに違いない。一方後者、すなわち翼飾りを被った顔を持たないタイプは反山遺跡M17出土の冠状玉器に描かれたもの（図16—4）として登場する。共伴する豆（図17—1）が反山遺跡M22出土のもの（図17—3）とほぼ完全に相同であることから、図16—2の図像と同時



1



4



2



5



3



6

図16 体軀を備えたシンボルBの図像（縮尺不同）

1 反山M12

2 反山M22

3 瑤山M2

4 反山M17

5 反山M14

6 フリア美術館蔵品

中国新石器時代の玉琮

期のものであることが判る。それに続くのが反山遺跡M14出土の三叉状玉器に描かれるもの（図16—5）である。目玉の外側上方に瘤状の突起が付く。相対的に口の大きさが縮小し牙の表現も曖昧になっている。共伴する玉琮から第三期に編年される。さらに時間的に遅れると思われるのが図16—6に載せるものである。フリア美術館に収められたD字状玉器に描かれたものである。眼はより一層細長くなっており、眉間の三角形の突起はより高くなっている。牙の

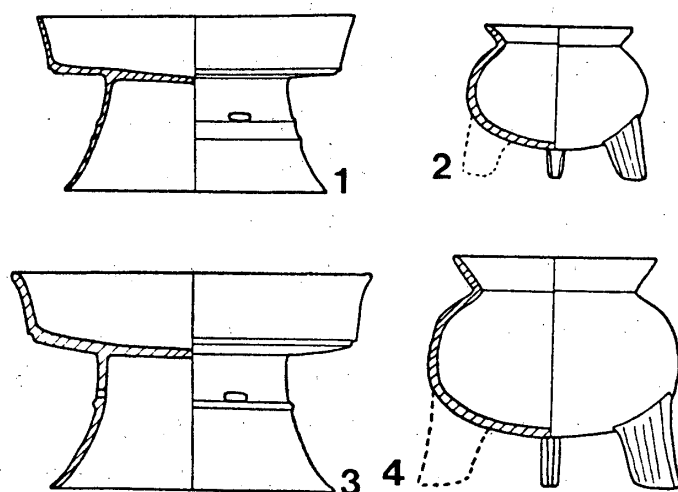


図17 反山遺跡出土土器（縮尺 1/6）

1 M17 2 M23 3, 4 M22

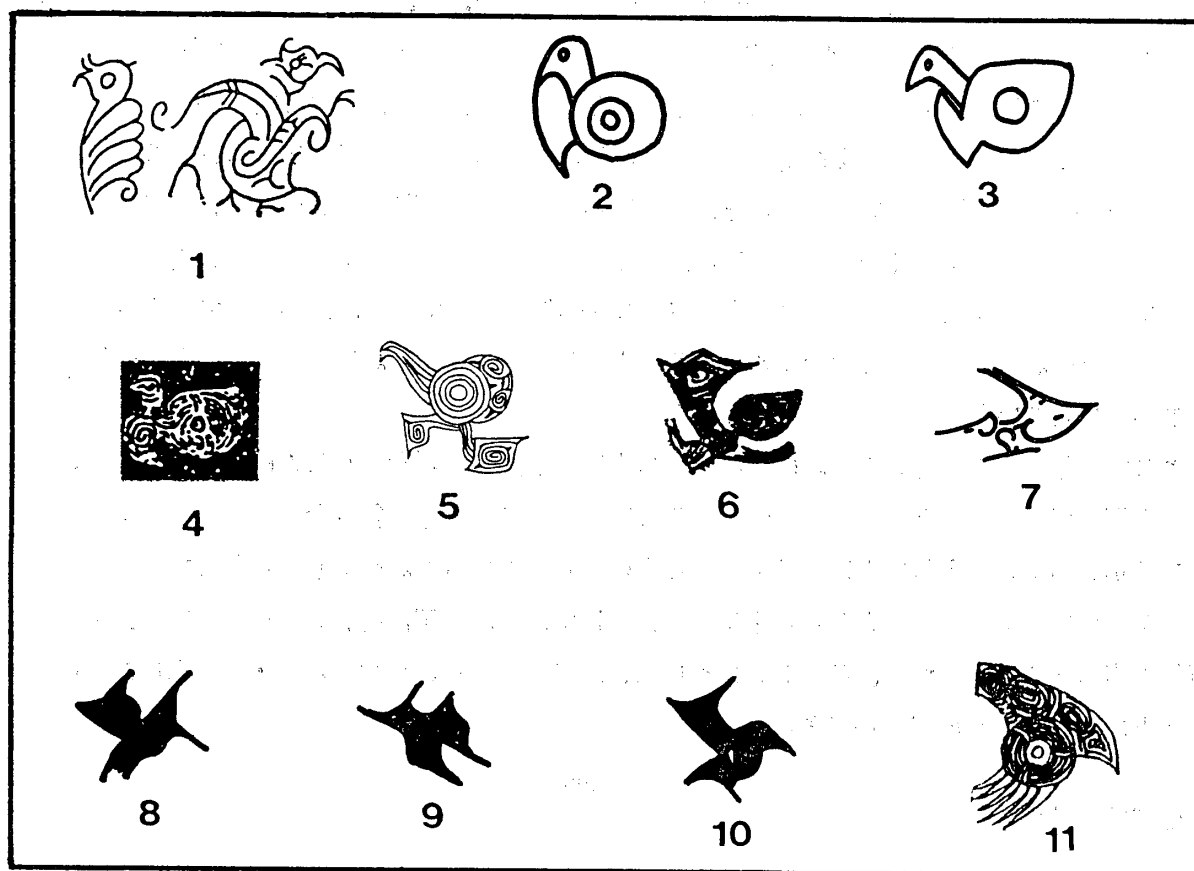


図18 良渚文化の鳥文（縮尺不同）

1 澄湖古井 2 反山M12 3 反山M23 4 福泉山T 4 M 6 5 瑶山M 2
6, 7 草鞋山M198 II 8, 9 福泉山T 27M 2 10 福泉山T 22M 5 11 反山M14

表現はまったく不明瞭である。博物館のコレクションで共伴する遺物などはまったく不明であり、したがって他に編年の根拠を持たないわけであるが、第三期に位置づけられる反山遺跡M14出土品よりも遅れることから、第三期の後半ないしは第四期にまで下るものと一応考えておく。因みに、これとほぼ完全に相同の図案を持つD字状玉器が北京の故宫博物院蔵品にもある。
文²⁸

最後に鳥文の変遷を概観しておこう。

鳥文はまず初めに澄湖古井出土の罐に他の動物とともに描かれたものとして登場してくる(図18—1)。この例では体の部分までが描かれている。注目すべきは顔の表現で、目玉と嘴からなる構成である。後の鳥文はこの第一期の顔の部分の表現から発達してくるのである。第二期前段の玉琮壁面に描かれた例(図18—2)では本来顔であったものが胴体へと転化している。そこから目玉と嘴を持った別の顔が出ている。胴体部分が元は顔であったことはそこに目玉が残っていることから明らかである。それから頸が伸び上がり水鳥のような形に変化したのが反山遺跡M23出土の玉璜に描かれる例(図18—3)である。共伴する鼎(図17—2)の形態が反山遺跡M22出土品(図17—4)と同一であることから第二期後段に位置づけられる。第三期の玉琮壁面に描かれる例では頸の下の突起の部分が僅かに翼を上げたような形態へと変わってくる(図18—4)。同じく第三期に属する冠状玉器に描かれた別の例(図18—5)では胴体から頸、翼、水掻きを精一杯に伸ばした姿をとるようになる。やはり第三期に相当する草鞋山遺跡M198Ⅱ出土の貫耳壺に描かれる鳥文(図18—6)も類似の形態を示している。同墓からはより写實的に描かれた鳥文(図18—7)を持つ貫耳壺も出土している。こちらの文様は、やはり同時期の福泉山遺跡T27M2出土の貫耳壺に描かれるもの(図18—8, 9)に近い。さらにそれは第四期の福泉山遺跡T22M5出土注口土器の文様(図18—10)へと変化していくのである。時間が前後するが、第三期にはもう一種の鳥文がある。反山遺跡M14出土の三叉状玉器に描かれるもの(図18—11)がそれである。足が鉤爪で表現されるという特色を持つ。体軀を備えたシンボルBのそれと通じる表現である。第五期に降る鳥文の例は今のところ知られていない。

ここで編年のまとめをしよう。はじめに注口土器の形態の変遷を追うことによって良渚文化を五つの小期に区分することができた。つぎにそれに則り玉琮の編年を行ったところ、注口土器編年の第二期がさらに前段と後段とに細分できることが明らかとなった。つまり、これまでの考察によって良渚文化は計6期に区分されることになったわけである。以下、それをローマ数字を用いてⅠ～Ⅵ期と表示することとする。その各期について、玉琮の断面形、シンボルA・Bおよび鳥文の形状をまとめて示したものが図19である。

○玉琮の性格

良渚文化の玉琮は、正式な発掘報告の出されたものについて言えば、呉江県王焰村出土の一点^{注9}を除いて、他はすべて墓葬の副葬品である。王焰村出土例にしても、ここが墓葬であった可能性が全く考えられないわけではない。したがって、この器物の用途や機能を推定するための最大の手掛か

中国新石器時代の玉琮

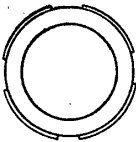




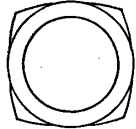




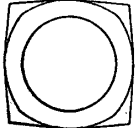


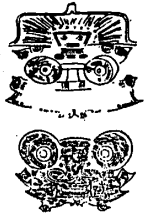

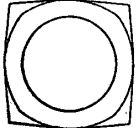








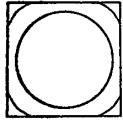


細分時期	注口土器分期	玉琮断面形	シンボル A	シンボル B		鳥文	主要墓葬
I 期	第一期						張陵山M4 瑤山M9
II 期	第二期	↓ 					反山M12 反山M16 瑤山M7
III 期		↓ 					瑤山M12 草鞋山M199 寺墩M4
IV 期	第三期	↓ 					福泉山T4M6 福泉山T27M2
V 期	第四期	↓ 					福泉山T22M5 草鞋山M198I
VI 期	第五期						福泉山T15M3 福泉山T23M2 寺墩M3

図19 良渚文化の細分と玉琮の変遷

りは墓葬の分析にこそ求められるべきである。この問題に対して最も重要な知見を提供してくれているのが瑤山遺跡である。この遺跡では合計12基（発掘以前に盗掘に遇ったM12をも含む）の墓が検出されている。その12基は北側に5基、南側に7基と2列をなして並んでいる。そしてこの南列の墓葬と北列の墓葬とでは副葬品に大きな相違があるのである。三叉形玉器、錐形飾、扁平玉斧そして玉琮と琮形管はすべて南列墓から出土しているほか、帯蓋柱形飾もM8出土の一点を除いて他の6点は南列墓からの出土品である。それに対して、玉璜、牌飾はいずれも北列墓から出土しており、円形牌飾も31点中M2出土の1点以外はすべて北列墓の副葬品である。数は少ないものの2点の玉製紡錘車とともに北列墓からの出土品である。このような副葬品の内容差はいったい何を反映しているのであろうか。瑤山遺跡の報告者はこれを男女の性差と解釈している。すなわち、玉斧を伴う南列墓は男性墓であり、紡錘車を伴う北列墓は女性墓である、と。筆者もこの解釈に賛成である。残念ながら瑤山遺跡では人骨の遺存状態が悪く、人骨からの性別判定はできなかった。人骨からの性別判定がなされている他の遺跡の例からも、玉琮を持つ墓の被葬者が男性である蓋然性はやはりかなり高いと見てよさそうである。墓に副葬されるからには、被葬者は生前においてもその器物を使用していたと考えられよう。^{文48}ここで一つ玉琮の持つ性格が明らかになったわけである。玉琮は男性に付属する器物である。

瑤山遺跡の際立った特徴として、12基の墓葬の副葬品として玉璧が1点も存在しないということ挙げることができる。このような現象は良渚文化の他の遺跡ではほとんど見られないことである。瑤山遺跡とは5kmほどしか離れておらず、時代的にもほぼ重複する反山遺跡でも11基の墓葬から計125点の玉璧が出土している。報告書に写真の掲載されているM20やM23では玉璧の多さが目を引くほどである。

この問題を解く鍵は瑤山遺跡の立地に求められるかもしれない。この遺跡は天目山脈の支脈を構成する山並の南側の麓に位置する小山の上にある。その南には茗溪という川を挟んで沖積平野が広がっている。反山遺跡をはじめとする良渚鎮一帯の良渚文化遺跡はいずれもこの平野上に位置している。瑤山遺跡に関してもう一つ注意しておかねばならないことは、ここは墓地として使用される以前には祭祀に関わる場としてあったということである。なぜ山の上が祭祀の場として選ばれたのであろうか。それは天を祭るためであったから、と考えるのが最も妥当である。であるとすれば、その祭壇のあった場所に葬られた者は専ら祭天の儀式に携わる者であった可能性が大きい。祭天の儀式に携わる者の墓に玉琮は副葬されるが玉璧は副葬されないというのであれば、祭天の儀器としての玉琮の機能が推定されるのではなかろうか。それでは玉璧の機能は如何、という疑問が当然のこととして浮かび上がってくる。しかし、現在筆者はこの疑問に答えるだけの材料を持ってはいない。ただし、かつて浙江省嘉興双橋遺跡で90点余りの玉璧が出土したという報道を重視するならば、^{文3}瑤山遺跡とは逆に玉璧のみを副葬する良渚文化墓葬の存在を想定することもでき、祭天とは異なる祭祀に玉璧が関わっていた可能性も考えられよう。因みに、双橋遺跡は杭嘉湖平原の直中に立地する遺跡である。いずれにしても、『周礼』に「蒼璧を以て天を礼し、黄琮を以て地を礼し……」と

あるのとは随分違った祭祀の体系が存在していたようである。

ところで、玉琮は他の器物と組み合わせられて一個の全体をなすものとして使用されていたのかどうかという問題は重要である。木や骨といった、遺物としては残りづらい有機質製品はともかくとして、他の玉器や石器などと出土位置に関して特定の関係にあるとは認められない。ただし、小型の玉琮（報告書では小玉琮と称することが多い）の場合のみは他の器物との関係が明白である。すなわち、玉斧の装飾品としての用途である。このことは例えば瑤山遺跡M7などにおいて明瞭に見て取ることができる。（総体としての）玉斧の刃の部分と柄の握りの部分とにそれぞれ小型の玉琮が括り付けられていたようである。草鞋山遺跡M198Ⅰの場合は刃の部分にのみ1個が付けられていたことが判る。

小型の玉琮を一般の玉琮と区別する場合、高さ5cmというのが一応の目安になりそうである。それ以下のものが小玉琮である。図20にその諸例を掲げる。2はⅠ期、1、3はⅡ期、4はⅤ期にそれぞれ属する。早くもⅡ期において目鼻の表現を欠くものが見られるなど、一般の玉琮に比べて著しく簡略化の進展が速やかである。これはおそらく、小玉琮が玉斧に付属する器物であって、それ自体がとりわけ注目されるものではなかったこと、そしてもう一つには、器体が小さいために細密な彫刻を施すことが困難であったことに起因していよう。

さてここで玉琮類似の玉器について触れておかなばならない。琮形管と柱形飾である。

琮形管とは外表面にシンボルの彫刻された、柱状で小型の玉器である。複節・柱状の玉琮をそのまま小さくしたという形態である。したがって、複節・柱状の玉琮とは大きさをもって区別するしかない。ここでは長さ10cm以下のものを琮形管とよぶこととする。また、長・幅比は2.5以上というのが目安になりそうである。孔径／辺長の比は2以下のものが多く、玉琮のそれに比べて小さいことが指摘しうる。従来、多くの報告書において、この玉器は玉琮の一種として取り扱われていた。琮形管としての独立した分類を行ったものとしては反山遺跡の報告書が最初である。反山遺跡の発掘報告者はこの器物が多くは玉管の集中部位に位置していることを見逃さなかった。つまり、琮形管は玉管と文字通り一連になった装飾品として用いられたものなのである。

各時期の琮形管を集成したものが図22である。Ⅰ～Ⅵ期の編年に当てはめた時期区分で言えば、4、5がⅡ期、1、2がⅢ期、7がⅣ期の例品となる。器周を四分割ではなく二分割してシンボルを描くことがあるなど、一般の玉琮に比べて簡略化が先行していることが判る。これは琮形管が小型の器物であり、当然のこととして文様を彫刻する画面が小さいということに関係していよう。小玉琮の場合と同じである。ところで、この琮形管はⅡ期に出現し、Ⅳ期までで姿を消している。このⅣ期に登場し、Ⅴ期、Ⅵ期と飛躍的に発展し、玉琮の中心的地位を占めるようになるのが複節・柱状の玉琮である。この両者は、大きさの大小が異なるだけで、形態は相似のものであることは先に述べたとおりである。そうしてみると、複節・柱状の玉琮は琮形管の大型化したものではないかと考えるのがもっとも理に適っているようである。琮形管は玉管とともに連ねられたものであった。これが大型化してからも縄のようなものに連ねておかれたものであるということは十分に考えられ

ることである。寺墩遺跡M3出土の一群の玉琮の配置はそうした用法を想像させるものである（図21）。

図23はその寺墩遺跡M3出土のすべての玉琮について、その高さと円形突出部の直径とをそれぞれ縦軸と横軸にとりグラフ化したものである。高さ／直径＝1の直線（図中の実線）を境界にして大きく二つのグループに分かれるこ

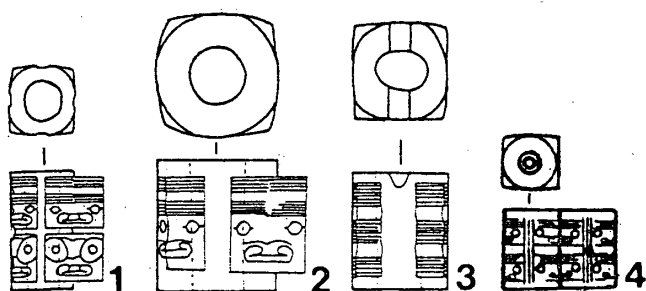


図20 良渚文化の小玉琮（縮尺 1/2）

1, 3 瑶山M7 2 瑶山M9 4 草鞋山M198 I

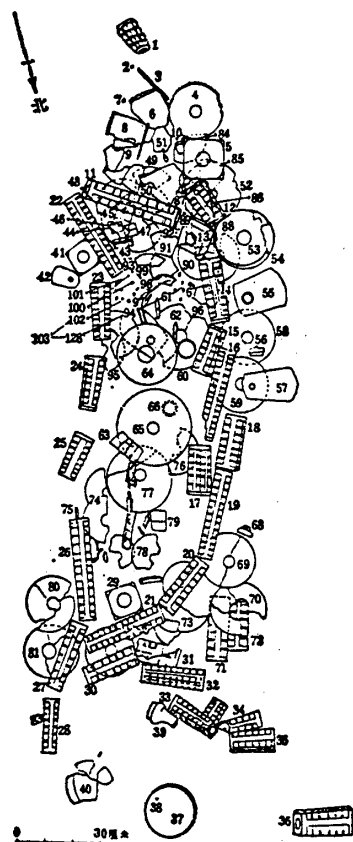


図21 寺墩遺跡M3平面図

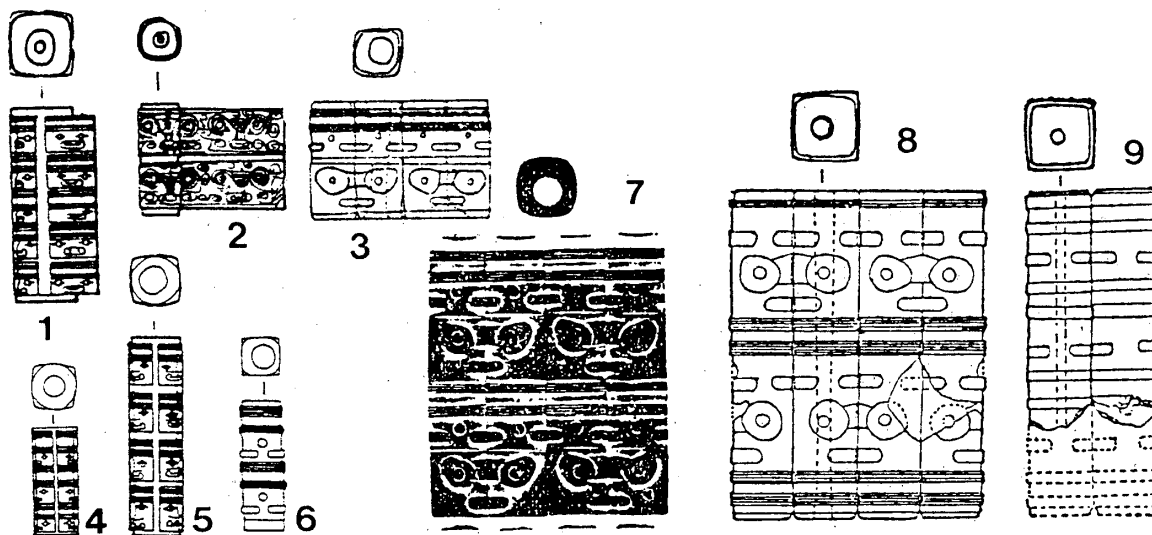
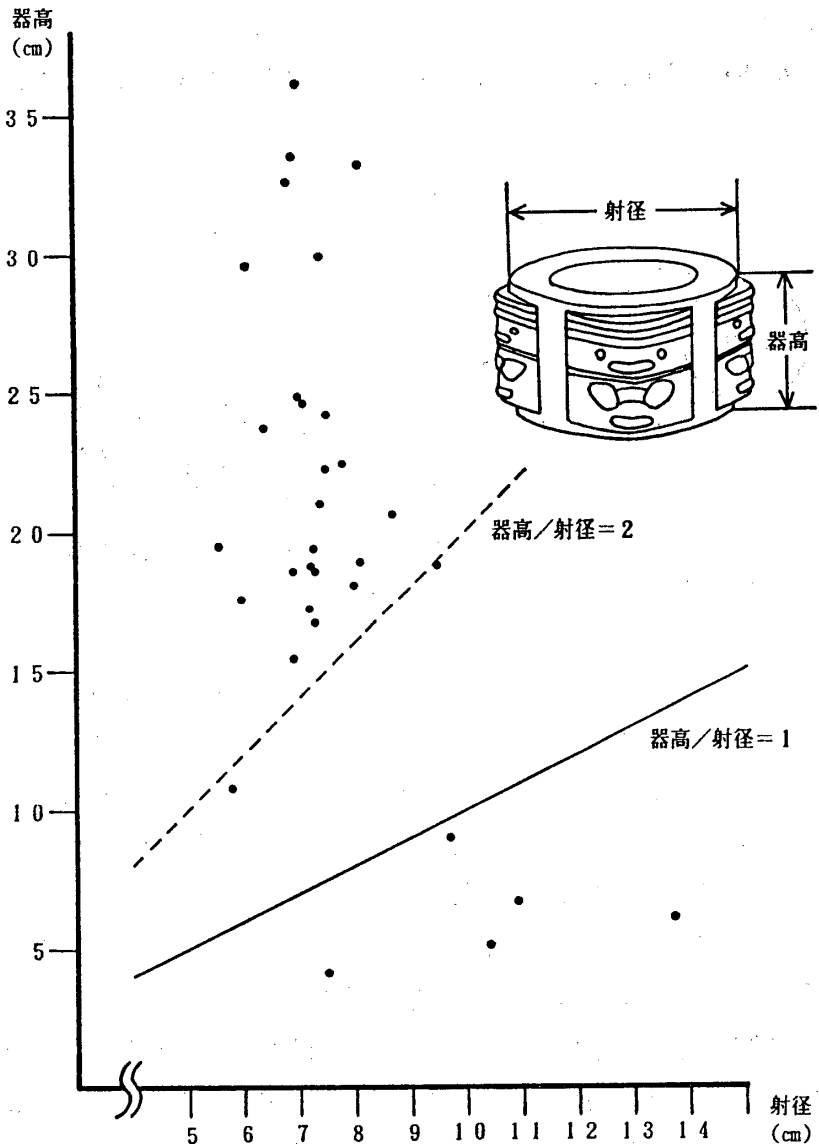


図22 良渚文化の琮形管（縮尺 1/2）

1, 2 瑶山M12 3 黄土山 4 反山M12 5 反山M16
6 反山M20 7 福泉山T4 M6 8, 9 張陵山東山M1

とが判る。直線よりも上に位置するのは直径に比して高さの大きいものであり、反対に直線よりも下に位置するものは直径に比して高さの小さいものである。そして前者は2例を除いて高さ/直径=2の直線(図中の破線)よりも上にあるのである。つまりこのグループがさきほどから「複節・柱状」と表現したタイプの玉琮であり、琮形管からの発展形である。一方、後者はⅠ期から連綿と続いているタイプであり、おそらく玉製腕環から分化したものである。この両者が良渚文化^{文64}人の観念の中でどのように区別されていたかは判らない。しかし、Ⅴ期以降この柱状のものが見た目の新奇さと、おそらくは製作効率の良さとによって次第に玉琮のなかで中心的な地位を占めるに至ったことだけは確かである。

ところで、この複節の玉琮であるが、その節数に何らかの意味づけはあるのであろうか。寺墩遺跡M3出土品について、節数ごとの点数をグラフに表したものが図24である。6節、7節にやや集中が見られるものの、その前後にもほぼ一様に分散し



ている。奇数・偶数のいずれか、あるいは特定数の倍数などに分布が集中するといった傾向は認められない。どうやら節数が何らかの数のシンボリズムの表象となっていることはなさそうである。

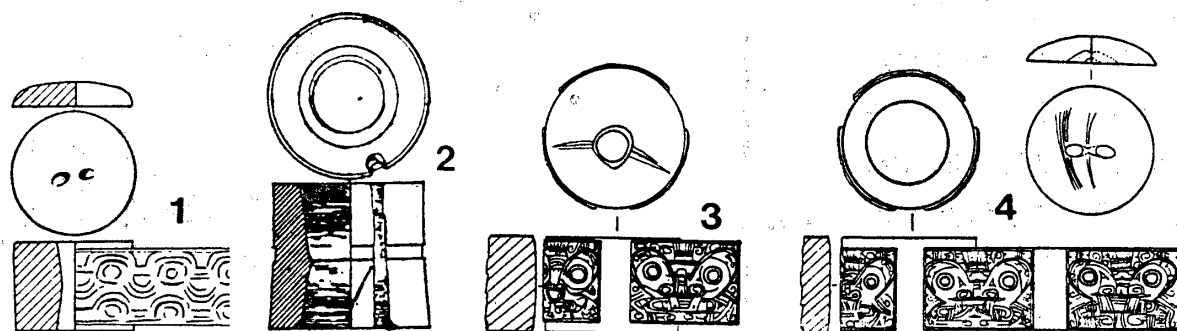


図25 良渚文化の柱形飾（縮尺 1/3）

1 反山M16

2 福泉山T23M2

3 瑶山M11

4 瑶山M9

次は柱形飾である（図25）。しばしば蓋を伴って出土するものがあり、その場合は帯蓋柱形飾とも呼ばれる。多くは無文であるが瑶山遺跡出土品（図25—3，4）のように器表面にシンボルを描くものもある。玉琮に比べて孔径が比較的小さいこと、そしてシンボルを描く画面が四面ではなく三面であることが相違点として指摘しうる。特に画面の数が異なることにはそれなりの意味がありそうである。ところで、この柱形飾にはボタン状の蓋が付くことが多い。その蓋に穿たれた孔の形状から見て、そこに紐を通し、その紐を柱形飾の孔にくぐらせて固定したものであることが窺える。瑶山遺跡では計7点の帯蓋柱形飾が出土しているが、いずれも南列墓の副葬品である。ということは玉琮と同じく男性に関わる器物であったということになるだろう。無蓋の柱形飾に関しては特に言及されていないところをみると男女に関わりなく副葬されたもののようである。

この器物の用途を推定する手掛かりを与えてくれるのが反山遺跡における出土状態の所見である。発掘報告書によれば、「多くは棺蓋の上（あるものは棺内に崩れ落ち、あるいは槨室内に転がり落ちて）に位置し、一部は棺底にある。葬具上のある種の付属品であるらしい。棺蓋上のは往々にして3点が墓内中部の縦軸線上に等距離に分布している」という。被葬者の身体のみならず棺までも玉器をもって装飾していたのである。

○玉琮の原材料

一般に玉と言う場合、それは軟玉と硬玉の双方を包括した名称として用いられている。しかし中国では普通軟玉のみを指し、硬玉すなわち翡翠と区別している。したがって、玉器とは一応軟玉製品のことであると考えて差し支えない。ところが時として、軟玉類似の鉱物組成を持ち、したがって外見や触感においても軟玉に似る他の岩石（仮玉）をも“玉”として一括することもある。中国考古学に関する発掘報告書や論文ではむしろ後者の用法に従っていることが多い。これは肉眼によ

る観察では軟玉と仮玉とを峻別することが難しいということにも因っている。良渚文化の玉器についてもまたしかりである。

軟玉とは陽起石〔actinolite, $\text{Ca}_2(\text{Mg, Fe})_5(\text{Si}_4\text{O}_{11})_2(\text{OH})_2$ 〕と透閃石〔grammatite, $\text{Ca}_2\text{Mg}_5(\text{Si}_4\text{O}_{11})_2(\text{OH})_2$ 〕の2種類の珪酸塩鉱物の総称である。軟玉とは言うものの、モース硬度で5.5～6.0とかなり硬いものである。比重は2.55～2.56である。基本的には黄緑色を呈するが組成成分の違い（特に鉄分の多寡）によって色調にも相違がみられる。色調の濃いものほど輝度は逆に低くなるということである。また加熱の有無や風化の度合いも色調の変化をもたらす要因になるらしい。

良渚文化の玉琮のうち、その原石の鉱物学的鑑定結果の公表されているものが4点ある。草鞋山遺跡出土品（M198 I : 1）^{文42, 46, 49}、張陵山遺跡出土品（M4 : 019）、寺墩遺跡出土品（M3 : 22）、張陵山東山遺跡出土品（T6 : 1）である。他に琮形管として張陵山東山遺跡出土品（M1 : 5）1点がある。草鞋山遺跡出土品および張陵山東山遺跡出土玉琮は透閃石、張陵山東山遺跡出土琮形管は陽起石と鑑定されている。残る2点に関しては「軟玉」と報告されているのみで、透閃石、陽起石の別は不明である。いずれにしても、すべて軟玉の範疇に収まるものであることに違いはない。琮以外の何種類かの玉器についても鑑定結果が出されているが、やはりその多くは軟玉製である。しかしそれと同時に、草鞋山遺跡出土の蛇紋岩製管（M198 I : 20）、張陵山東山遺跡出土の蛇紋岩製珠（M1 : 22）などの仮玉製品もある。ただし、後者の珠は別の鑑定者によって透閃石と同定されており、軟玉と仮玉との識別がかなり困難なものであることが窺える。

さて、これら玉材の産地であるが、現在、太湖周辺地区にその産出地は知られていない。しかし、寧鎮地区の鉄鉱山あるいは銅鉱山のボーリング試料中には玉材が検出されており、地質学的にはその存在が確認されている。後述する丹徒磨盤墩遺跡のような玉器製作址が発見されていることから、少なくとも寧鎮地区のどこかには原石産出地があった可能性が大きい。原石採取の方法についてであるが、寺墩遺跡出土の高さ36cm余りの玉琮の材料となる原石の大きさを考える時、流れのゆるやかな長江の下流域にそれほどの大きさの川原石が存在していたとは想像し難いことであり、かつまた、金属器使用が未だ開始されていなかったであろうこの時期に坑道を穿っての採掘を想定することも難しい。であるとすれば、やはり崩落や水食によって露出した原石の露頭を見つけ出し、それを露天掘りにしたと考えるのがもっとも妥当であろう。一方、玉材が他地域から将来された可能性も全く捨てきれないわけではないが、新疆崑崙、同瑪納、四川汶川、河南淅川、遼寧寬甸等の中国国内の他の軟玉産地のそれとは顕微鏡的構造が異なっており、これら各地の原材が遠路はるばるもたらされたとする想定には困難があると言えよう。^{文42}

ところで、同一遺跡出土、さらに厳密に言えば、同一墓葬出土の玉器であっても、陽起石・透閃石の別、あるいは、そのいずれか一方であっても色調に相違が見られることがあるが、これが複数の産地から原材がもたらされたことを意味するものであるか否かも不明である。なぜならば、軟玉は同一産地内、同一鉱床中においても、その色調には変異が見られるということである。^{文42}

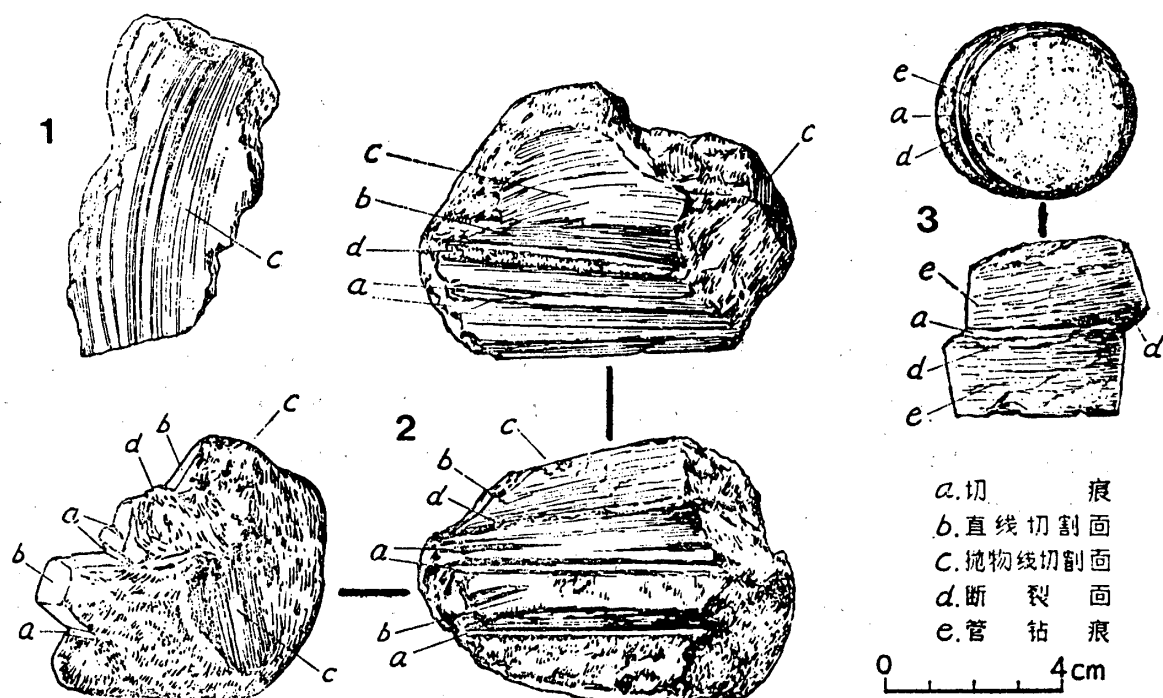


図26 江蘇丹徒出土の玉残余物

良渚文化玉器の製作・加工法の解明にもっとも大きな貢献をなしたのは周曉陸、張敏両氏による研究であろう。両氏は従来の多くの研究を踏まえた上で、江蘇丹徒出土の玉器製作時残余物を丹念^{文27}に分析されている。ここでは暫くその研究結果を紹介することとしよう。

分析の対象となった玉残余物は3点である(図26)。標本1(図26—1)は丹徒県大港磨盤墩遺跡出土の菜綠色透閃石である。形状は不定形を呈する。それぞれ最大の部位で、長さ7.5cm、幅3.6cm、厚さ3.0cmを測る。一面が切断面となっており、その上には深さの一樣でない放物線状の加工痕が十数条残されている。線と線との間隔も一定ではない。また切断面は磨研光沢を有している。他の部分は原石面を残す。標本2(図26—2)は標本1と同一遺跡出土の墨綠色透閃石である。やはり形状は不定形で、最大部位の長さ8.3cm、幅6.9cm、厚さ5.5cmとなっている。一面に長さ、深さのそれぞれ異なる十数条の平行切割痕が走っている。また数十本の砂粒擦痕も認められる。1cmあたり20余条と細かなものである。そのほかに2面にわたって放物線状の切割痕を留めており、その面は磨研光沢を有している。標本1とは異なり、複数回、多方向に割り取りが行われている。標本3(図26—3)は丹徒県大港中学北運動場から出土した緑・褐混色の透閃石である。この標本は「管鑽法」によって穿孔された残りの芯である。両端面はいずれも原石面を残している。二つの円錐台が底面を接して繋がった形を成していることから、両面からの穿孔が行われていたことが判る。ただしその底面は5mmほどずれており、その部分に幅1.6mmの「管鑽」壁痕を留めている。芯の通高は4.2cm、円錐台の傾斜角は上下ともに10度である。芯の外壁面には1cmあたり24本と

いう細かな線条砂粒痕を明瞭に見て取ることができる。因みに、磨盤墩遺跡と大港中学北運動場遺跡とは 100m ほどしか隔たっておらず、本来は一つの遺跡と考えられるという。

次に、玉残余物から復元される玉器製作法についての両氏の見解を引き続き紹介していこう。

(1) “開眼”

原材外面の風化部分を除去し、新鮮な玉質を露出させることを“開眼”という。当時、その作業に用いられたと考えられる工具としては石塊、石斧、石錘などがある。

(2) “解玉”

目的の玉器を製作するために“開眼”された玉材を切り割ることを“解玉”という。これには大きく分けて三つの方法がある。一つめは金属円盤法とでも呼ぶべき方法で、『天工開物』に「凡玉初剖時，冶鉄為円盤，以盆水盛砂，足踏円盤使転，添砂剖玉，逐忽劃断」とあるのがそれである。この方法によって切断された場合、切断面は比較的平滑で、一条一条の配列の整った細密な弧線が残される。その弧線同士の間隔はほぼ等しい。二つめは弓鋸法とでも呼ぶべき方法で、玉材を「ホルダーの上に置き、たびたび水に浸し砂をまぶし、かつまた二人の人間が鋼線を縋り合わせて作った弓鋸をゆっくりと挽き動かし、玉材を小塊あるいは切片へと切り割っていく。」この場合、弓の弦の両端から全体へと力が加えられていくため、切断面には凹凸が生じ、放物線状の痕跡が残されることとなる。また条線と条線との間隔は不均一である。三つめは竹鋸法である。玉材を固定し、水を加え砂をつけながら竹板を往復運動させて切断する。切断面は平滑で、平行直線が痕跡として残される。

それでは、良渚文化期に一体いかなる方法が用いられていたのであろうか。これまでのところ金属器使用の証拠が得られていない以上、金属円盤法はとりあえず除外してよからう。もちろん他の材質の円盤は想定しうるが、その場合かなりの硬度を持つものでなければならず、砂岩や花崗岩といった石質材料が使用されたと考えねばならないであろう。しかし、こうした材料では円盤の厚みをごく薄く仕上げるのが困難である。また、考古学的にもそれらしき遺物は発見されていない。一方、実際の玉残余物に残された加工痕には凹凸があり条線の間隔が不均一で配列の整わないものである。これはまさに弓鋸法のそれにほかならない。当時金属器が知られていなかった以上、革紐製の弓が使用されたとするのがもっとも妥当である。水を加え砂をまぶすことは同様である。あるいは、革紐を弦に張らずとも、その両端を直接手に持って往復運動を行うことによっても可能であったであろう。なお、“解玉砂”（研磨砂）には石英（モース硬度 7）の含有率が 20～30% と高い黄砂が用いられたようである。残余物上の砂粒痕跡から、その大きさは 120 号と測定される。現代の研磨砂の大きさ（100～150 号）と変わるところがない。篩洗を経たもっとも効率のよい特定の大きさのものだけを使用していたことになる。

(3) 穿孔

穿孔には 2 種類の方法が用いられていた。ドリル法と管鑽法である。ドリルには硬度において軟玉に優る石製工具が使われたはずである。磨盤墩遺跡出土の燧石製小型石器がそれである。燧石

すなわち石英の硬度は7である。孔径 0.1~0.3cm の比較的小さな孔を穿つ際に使用されたもののようである。一方の管鑽法に使用された工具としては竹管と骨管とが想定される。一条の堅槽を設け、そこに水と砂を注ぎ込みながら作業を進めたものであろう。玉材を固定し、定められた位置に管鑽をあてがい、玉材方向へ圧力を加えつつ回転させ穿孔を行なったと推測される。技術の未熟さにより管に揺るぎがあったこと、また管材自体が軟弱で磨耗しやすかったことによって、孔の口縁が拡がってしまうことは避けられなかった。また、孔が深くなるにつれて摩擦が強まるため両面穿孔を行いそれを軽減している。

(4) 研磨

砥石を用い水をかけながら玉器の表面を磨き上げる工程である。切割時の痕跡はこの段階で除去されるが、時には深く刻まれた傷が残されたままとなることもある。

(5) 鏤刻

玉器表面に彫刻を施す工程である。やはり石英製の小型石器を工具として使用したものと推測される。磨盤墩遺跡出土品にもその用途に相応しいと考えられる石器（帯柄尖状器）が存在する。

(6) 艶出し

獣皮や竹片を用いて最終的に磨きをかけ光沢を出す工程である。獣皮に含まれる動物性脂肪、竹に含まれる珪酸が艶出しの効果を発揮する。

以上が周曉陸、張敏両氏による玉器製作法研究のあらましである。詳細な観察に基づき多岐にわたって分析を進めており、きわめて説得力に富む内容となっている。良渚玉器の製作法に関しては言い尽くされた感があるが、蛇足ながら若干の補足的説明を試みる。

まず、“解玉”時に残された放物線状の痕跡について、それを製品の側から見てみることにする。良渚文化玉器中この種の加工痕を留めるものは決して少なくない。それらの幾つかを図27に掲げる。琮（図27—1，2），斧（図27—3），璧（図27—4，5），蟬（図27—6），柱形飾蓋（図27—7）とあらゆる種類の器物表面に見ることができる。同一の技法によって“解玉”が行われた証拠である。時期的にもⅠ期からⅥ期までをカバーしており、良渚文化期を通じて同一技法が維持されていたことが判る。図27—1は寺墩遺跡M3出土玉琮の拓本である。長さ数cmの弧状の痕跡が残されている。汪遵国氏はこれを円盤法によって残されたものであるとみなし、直径11，16，26cmの3種類の円盤が用いられた結果だとする。^{文9}

しかし、1個の玉琮を製作する際、それも一つの側面を切り出すという工程のなかで3種類の円盤を使用するということは考え難い。やはり、周、張両氏が主張されるように、弓鋸法が採用されており、その力加減次第で異なった痕跡が残されたとするべきであろう。そのもっとも明確な証拠となるのが張陵山東山遺跡出土の玉璧（図27—5）表面に残された痕跡である。もっとも深い弧状の切れ込みの外側が浅く抉られている。円盤法が用いられていたとすれば、弧状の切れ込みの内側が抉られるはずである。

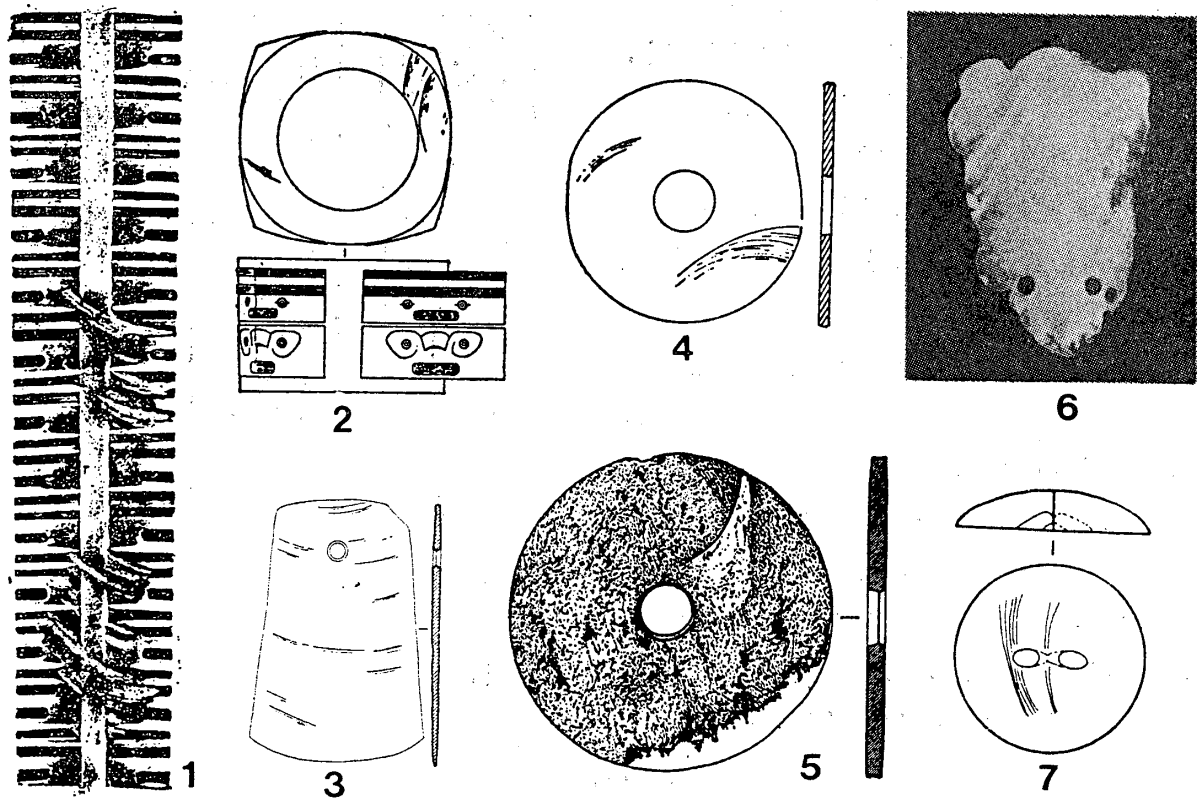


図27 良渚文化玉器上の製作痕（縮尺不同）

- | | | |
|--------|------------|---------|
| 1 寺墩M3 | 2 福泉山T22M5 | 3 少卿山M1 |
| 4 嘉菱蕩 | 5 張陵山東山M1 | 6 張陵山M4 |
| | | 7 瑤山M9 |

次に穿孔についてである。穿孔法にはドリル法と管鑽法の2種類があったことは周、張両氏の指摘するとおりであろう。磨盤墩遺跡出土の石英製小型石器が前者の工具に当たるであろうことも首肯すべき見解である。この磨盤墩遺跡からは422点の石錐が出土している。もっとも、この遺跡は後述する^{文45, 62}ように複数時期の重複遺跡であるので、そのすべてが良渚文化期の遺物であるというわけではない。図28—1～11に石錐の諸例を掲げる。報告書ではこれらを7種類に分類しているが、ここではそれに触れない。残念ながら詳細な使用痕の研究は行われておらず、したがって石器のどの部位にまで

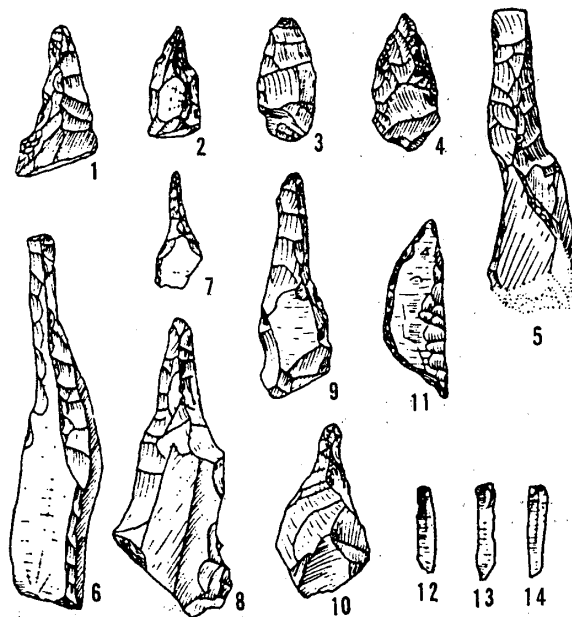


図28 磨盤墩遺跡出土小型石器（縮尺 1/2）

使用時の剥離が及んでいるかは不明である。穿孔時に基部のかなり近くまで穿ち進んだとしても、石器の大きさからして直径を2 cm 越える孔を開けることは不可能であったであろう。であるとすれば、玉琮や玉璧の穿孔にはもう一つの方法、すなわち管鑽法が用いられたと考えられる。大港中学出土の芯も比較的小型の玉琮のそれであった可能性もある。ところで、複節・柱状の玉琮では孔内壁にしばしば削り残しの段が残されていることがある。そうした例の幾つかを簡略化して示したのが図29である。これらの玉琮が管鑽法で穿孔されたものとした場合、どのような形状の芯が残されるであろうかを併せて示してある。斜線の部分が想定される芯である。この図から判るように、孔内壁に段が残っている場合（未貫通の場合を含む）、芯はその段と一体のままであるはずである。つまり、何らかの力を加えて芯を折り取らなければ孔は貫通しない。芯を折り取ったとすればその断裂面の識別は比較的容易であろうと思われるが、実際にそうした観察が行われた例を知らない。是非その観察所見を知りたいものである。因みに、管鑽法で切り取られた芯の部分は他の玉器の材料として二次的に利用し得たであろう。例えば、複節・柱状の玉琮の芯であれば錐形飾に、という具合にである。玉材の利用効率という点からみても管鑽法のほうがより優れた穿孔法であったと言える。

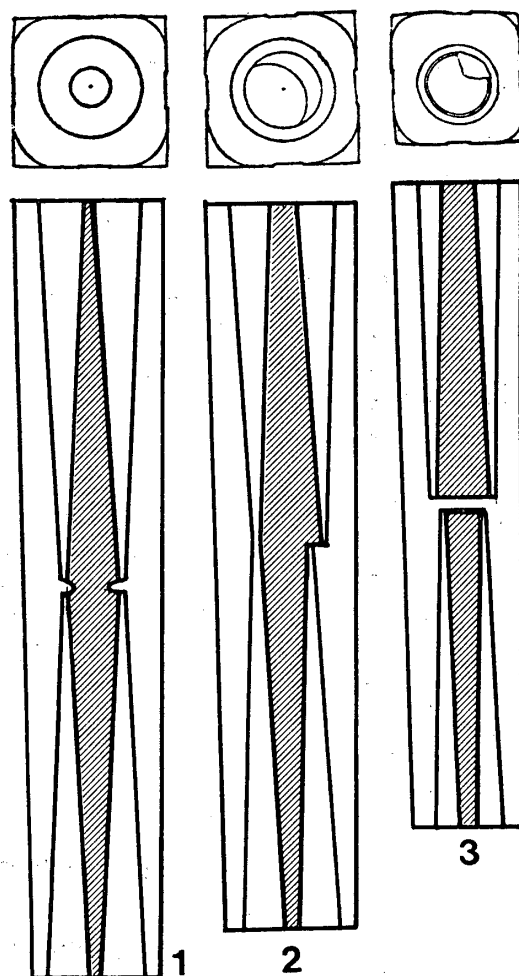


図29 玉琮断面図（縮尺 1/4）
（いずれも寺墩M3出土）

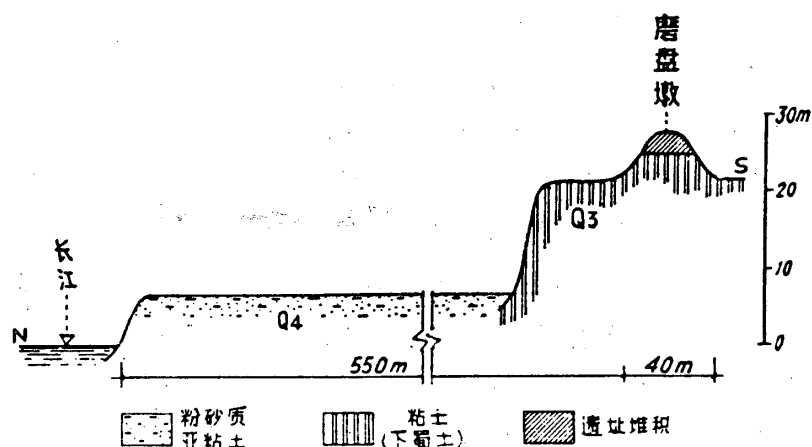


図30 磨盤墩遺跡地層断面図

磨盤墩遺跡出土の小型石

器には穿孔以外の用途に供せられたと考えられる器種も存する。石錐の一部（図28—7）や細石片（図28—12～14）がそれである。繊細で鋭利な刃先あるいは先端を持っており、玉琮表面に微細な

彫刻を施すのに相応しい。

最後に、磨盤墩遺跡の性格について言及しておきたい。磨盤墩遺跡は江蘇省鎮江市の東 28km, 丹徒県大港鎮に位置する。長江の南岸から 550m^{文62}ほど隔った段丘上にある磨盤墩と呼ばれる崗地上の遺跡である。1982年、南京博物院と丹徒県文教局によって 88m² の面積にわたって発掘調査が行われた。土層は第一層から第五層までに分層されており、そのうちの第五層が崧沢文化期、第四層が良渚文化期のものである。編年の指標となる土器や完形玉器の出土点数が少なく、各文化期における細別時期までは特定することはできない。88m² という比較的小さな発掘面積にもかかわらず、石核、石器、フレークチップなど合わせて 5,532点（一部採集品をも含む）が出土したということは特記に値する。第一層から第五層まで各層序に分布しているが、量的には第五、第四の下部二層に多く、それよりも上層のものは攪乱による混入と考えられるものであるという。異常なまでの打製小型石器の多さ、それに対して土器、磨製石器がきわめて少ないこと、そして散発ながらも玉器（玦、小璧、錐形飾、棒状器）や玉残余物が見られることから、一般の居住遺跡や墓葬遺跡ではなく、玉器製作址としての性格付けが行われたわけである。そもそも、太湖周辺の新石器時代遺跡では良渚文化期は勿論のこと、河姆渡文化期以来通じて打製石器はほとんど出土しておらず、崧沢文化期そして良渚文化期に至るまで打製石器製作の技術的伝統が残存していたことさえ驚くべき新発見であった。さらに注目すべきことに、石英製小型石器を主体とする同様の遺跡が磨盤墩遺跡付近の東西 14km ほどの範囲内で、初歩的な一般調査によるだけで既に他に 7カ所も発見されているという。いずれも長江南岸の比高 20~25m の崗地上に位置している。つまり、磨盤墩遺跡一帯は玉器そしておそらくは石器の一大生産地であったようである。

ところで、寧鎮地区（南京から鎮江にかけての長江流域）の山地には軟玉の鉱床が存在することが地質学的に明らかにされていることは前述した。磨盤墩遺跡はその東端に位置しているのである。このことは大いに示唆的である。もっとも、遺跡そのものは粘土の段丘上にあり、長江に至る間は沖積地となっている（図30）。遺跡のごく近辺に玉材の産地があるとは考えられない。ここで参考にするべきは鎮江近辺という、大局的に見た際の遺跡立地の重要性である。鎮江—揚州間は歴史時代を通じて長江渡河の最大の要所であった。磨盤墩遺跡のある地点、大港鎮の地名は文字通り大きな船着き場の意味であろう。常州、蘇州、そして上海、杭州へと向かう陸路は鎮江を起点としている。煬帝の大運河、現代の京滬鉄路いずれもこのルート沿いである。常州には寺墩遺跡、蘇州呉県には草鞋山遺跡、張陵山遺跡、上海には福泉山遺跡、杭州北郊には反山遺跡、瑤山遺跡があることを念頭に置く時、鎮江よりも上流の長江沿岸に産する玉材を磨盤墩遺跡一帯で陸揚げし、そこで玉器に加工して各地に供給する、このようなシナリオもあながち見当外れではあるまいと思われてくるのである。ただし、玉器出土遺跡の近傍においても玉器製作が行われていた可能性をも付言しておかねばならないであろう。浙江省文物考古研究所の牟永抗氏は、かつて玉残余物を採集したことをその論文に記されている。地点は明記されていないが、おそらく浙江省内、それも良渚鎮一帯でのことだったのでなかろうか。^{文70} 注目すべき情報である。

3. 他地域の玉琮

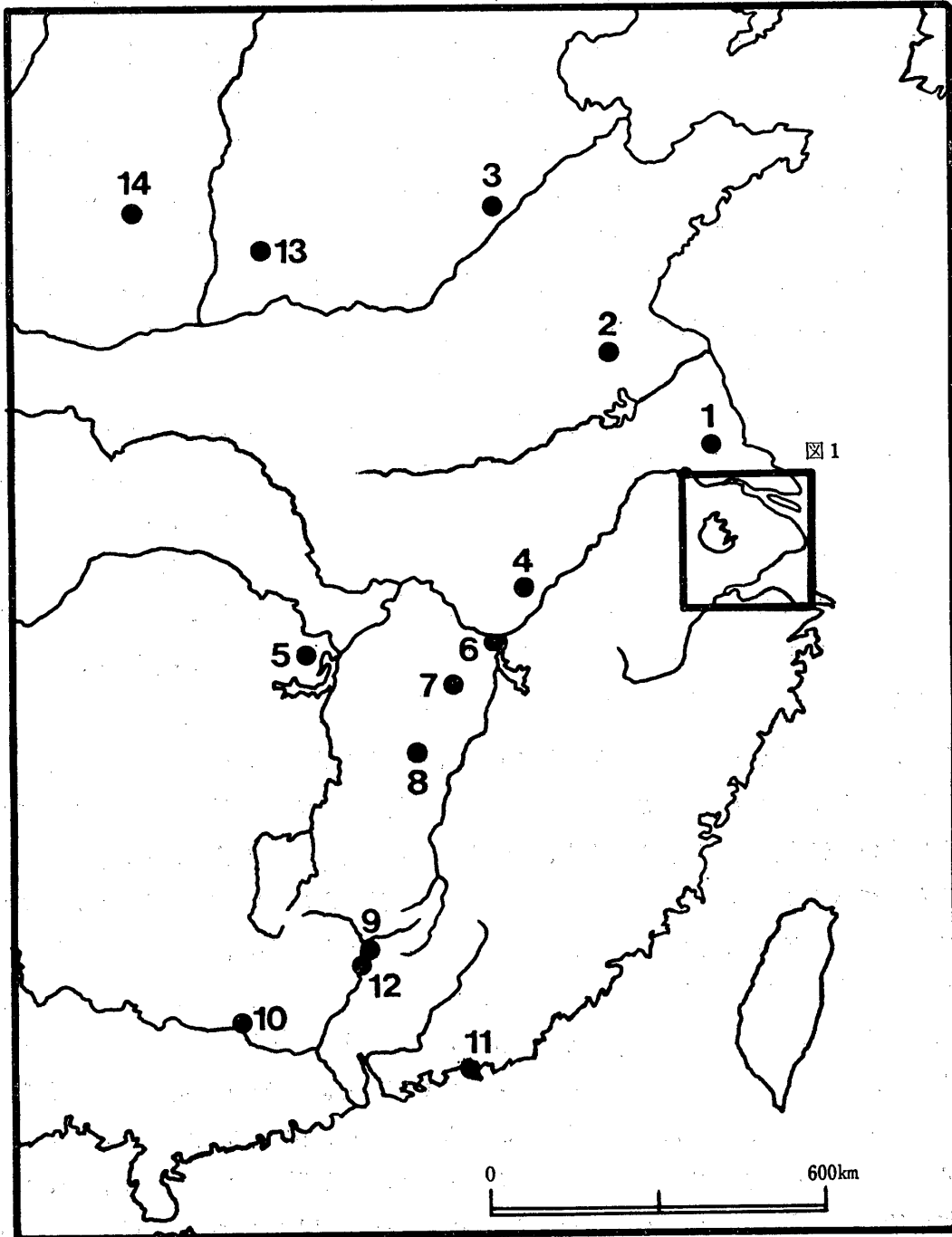


図31 中国各地の玉・石琮出土遺跡

- | | | | | |
|-----------|-----------|----------|------------|-----------|
| 1 海安・青墩 | 2 新沂・花厅 | 3 荏平・尚莊 | 4 潜山・薛家崗 | 5 安郷・度家崗 |
| 6 徳安 | 7 靖安 | 8 新余・変電所 | 9 曲江・石峡 | 10 封開・鹿尾村 |
| 11 海豊・田垌圩 | 12 曲江・床板様 | 13 襄汾・陶寺 | 14 延安・芦山峁村 | |

中国新石器時代の玉琮

中国新石器時代の玉琮に関して言うならば、良渚文化が質・量ともにおいて他地域の諸文化を圧倒している。これは発掘調査の精粗が多少なりとも影響してはいようが、やはり根本的には、玉琮を持つ文化と持たざる文化という、文化の性格に関わる問題であろう。

それでは、各地出土の玉琮を順に見ていくことにしよう（図31参照）。

・江蘇省海安青墩遺跡

文57

基本的には長江下流域の新石器文化の範疇に収まる遺跡であるが、長江の北側という位置からして、蘇北・魯南の大汶口文化の影響をも受けた文化内容を見せている。文化層は三期に区分される。下層は馬家浜文化圩墩期、中層は崧沢文化、上層は良渚文化に相当する時期のものである。

残念なことに、玉琮が発見されたのは考古学的発掘調査を通じてではなかった。なんと人家の肥溜めの中で発見されていたものを、調査のためこの地を訪れていた南通博物館の館員が徴収したものであるという。琮のほかに璧、璜、鐲、垂飾等8種16点の玉器が発見されている。この発見を契機として、この後3年間にわたり515m²が発掘され98基の新石器時代墓が検出されたが、玉琮や玉璧は1点も出土しなかった。たまたま数少ない玉器副葬墓の上に肥溜めが掘られたということであろう。玉器のセットから見て、それが良渚文化のものであることは疑う余地がない。したがって、その墓は上層に属するものであったということになる。

採集された玉琮は1点のみである。報告書には「碧玉で、外方内円の筒形に作られている。その上下の口の部分はやや凸出しており、四面の中間にはいずれも一条の幅広でまっ直ぐな浅槽が磨き出されている。槽の両側には二組の平行弦文と二つの対称な円圈文がある。中央の大円孔の壁面は比較的平滑である。高さ5cm、幅8cm、孔径5.1cmである」と記載されている。「平行弦文」が鉢巻き、「円圈文」が眼の表現であることは明らかであり、典型的な良渚文化の玉琮であることに間違いはない。写真や実測図が示されていないことが惜しまれる。

・江蘇省新沂花厅遺跡

文59

大汶口文化花厅期の標準遺跡としてつとに知られた遺跡である。1987年4月、採土中の農民が多くの玉器を掘り出し、南京博物院の調査が行なわれるところとなった。その正式な発掘報告は未刊であるが、「発掘紀要」によって概略を知ることができる。

発掘面積は延べ1,600m²に及ぶ。重点的に調査が展開されたのは「北区」で、1,328m³の範囲から22基の墓葬が発見され、250点に上る玉器が出土している。その器種としては琮、璧、錐形飾、鐲、環、佩飾、琮形管などがある。その多くはM4、16、18、20の4基の「大墓」の副葬品であるらしい。玉琮が合計何点出土しているのかは不明である。うち1点、M18出土の「短筒形玉琮」については、「兩節に分かれており、四つの角を中線として四組の簡化した神人獣面文が飾られている」と紹介されている。琮形管や錐形飾にも獣面文の施されたものが少なからずあり、全体的に見て、やはり紛れもなく良渚文化の玉器のセットである。

ところで、江蘇省北部が大汶口文化の分布範囲であり、花厅遺跡がその代表的な遺跡であることは言うまでもない事実である。「発掘紀要」もこれらの玉器を出土した墓を「大汶口文化墓葬」と

記している。しかし、今回発掘された一連の墓葬の性格については、やや複雑な問題が潜んでいそうである。筆者は1988年12月南京博物院を見学した際、紀仲慶、鄒厚本両氏の取りはからいにより、花庁遺跡出土品の一部を見学する機会を得た。未発表資料であるので、ここに詳しく紹介することは差し控えるが、土器の一部は明らかに典型的な良渚文化のそれであった。時期はⅥ期相当のものである。福泉山遺跡T23M2（Ⅵ期）に副葬されていた背水壺（図32—1）が江蘇省邳県大墩

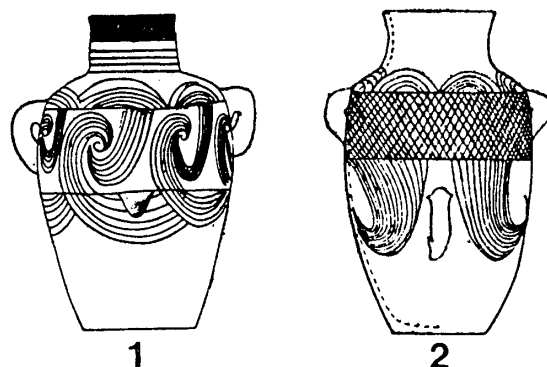


図32 背水壺の比較（縮尺不同）

1 福泉山T23M2

2 大墩子M107

子遺跡の花庁期墓出土のそれ（図32—2）と相同であることから、良渚文化Ⅵ期と大汶口文化花庁期との時間的併行関係が明らかになっていたわけであるが、今回の花庁遺跡での発見はそれを裏打ちするものである。さて、問題となるのは、これらの良渚文化の土器が、そして良渚文化の玉器が花庁遺跡の墓葬のなかでどのように位置づけられるのか、ということである。あくまでも大汶口文化の遺物を主体とする墓葬の中に散発的に良渚文化の遺物が入り込んでいるのか、それとも、良渚文化の土器と玉器を主体とする墓葬が他の大汶口文化墓とは別個に存在するのか、ということである。もしも後者のような状況であるとするならば、良渚文化を担った支配者が大汶口文化の地へと北漸していった、と想定することができるのではなかろうか。一刻も早い本報告の出版が待ち望まれる。

・山東省平尚莊遺跡^{文19}

文化層は三期に区分され、そのうちの最下層（尚莊第一期文化層）から玉琮が出土している。報告書では、「内円外方の肉薄で高さのある玉琰」と記載される器物であるが、山東省博物館に展示されている実物の解説には「玉琮」となっている。報告書には写真、実測図等が載せられていないため、図33に筆者自筆のスケッチを掲げる。部分的に刻線が入れているが、獣面文その他の文様彫刻は認められず、また、内円部の突出もない。

尚莊第一期文化層は、一般に言うところの大汶口文化中期から晩期への過渡期に属するものである。花庁期は大汶口文化中期初頭であるから、前述の花庁遺跡出土品からはある程度遅れるものである。長江下流域では良渚文化がその最末期にあるか、あるいは既に終幕を迎えている段階であ

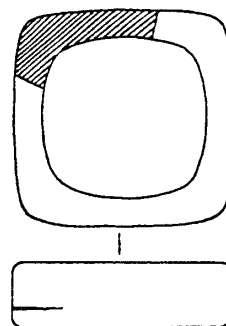


図33 尚莊遺跡出土玉琮
（縮尺 1/2）



図34 中国歴史博物館
藏玉琮

中国新石器時代の玉琮

り、この時期相当の玉琮はこれまでのところ知られていない。したがって、尚莊遺跡出土の玉琮が未知の良渚式玉琮そのものなのか、あるいは、花庁期に良渚文化から移入されたものが在地的に変容を遂げたものなのかは即断できない。

・中国歴史博物館所蔵玉琮^{文31}

1958年、尹世安^{注10}なる山東省出身とおぼしき人物から中国歴史博物館が購入した玉琮である。もともと山東省青島で入手されたものであるとの情報もあるようであるが、出土地および出土状況はまったく不明である。筆者は本稿を草するに際し、考古学的コンテキストから遊離した博物館蔵品等の遺物は意識的に研究対象から除外している。しかしこの1点については、それがとりわけ大きな重要性を持つものであることから、例外的に言及するものである。

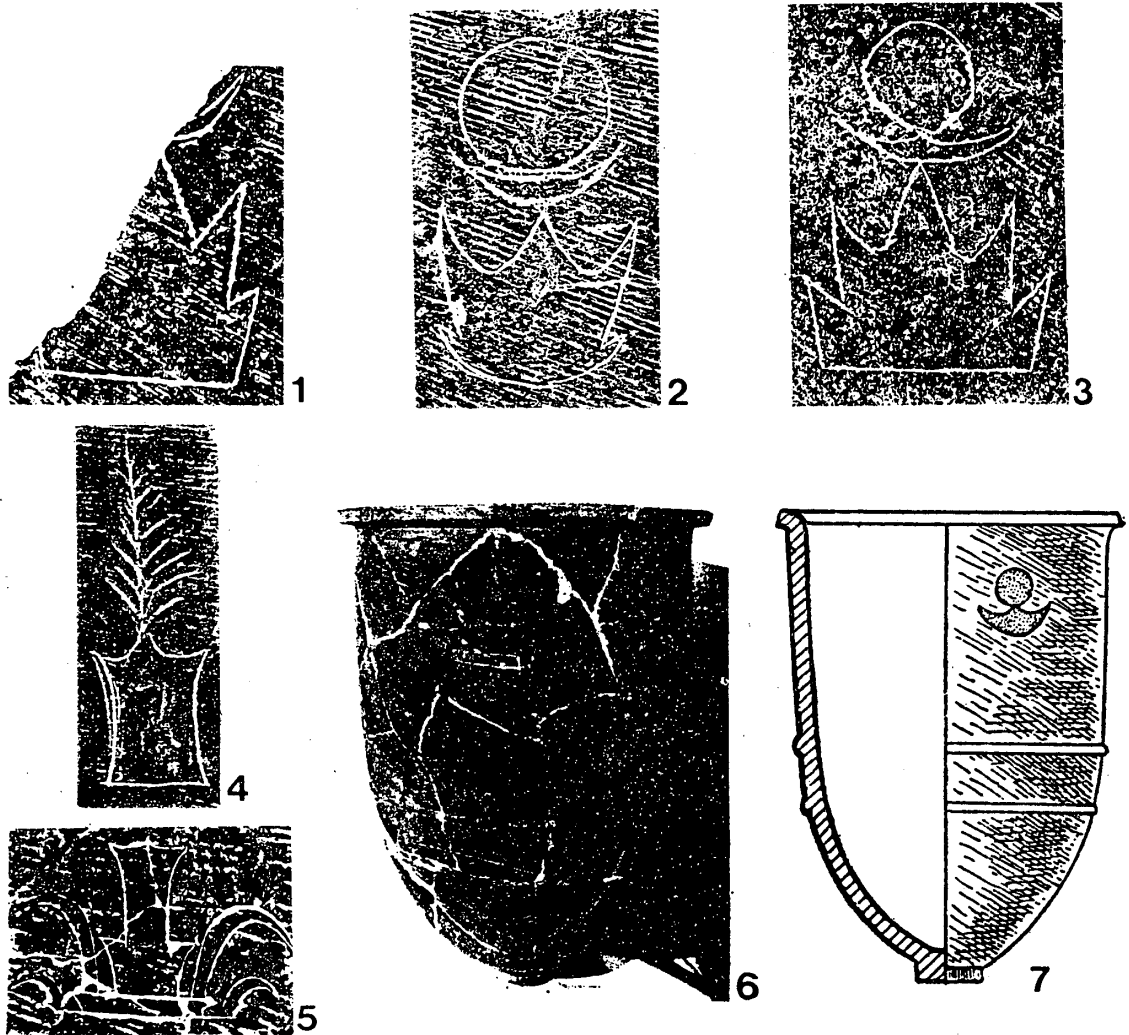


図35 大汶口文化の刻文土器

1 諸城・前寨

2 莒県大朱村

3~7 莒県陵陽河

該器（図34）は岫岩軟玉製で、深碧色を呈する。19節からなり、高さ49.2cmを測る。辺長は上端で6.4cm、下端で5.65cmである。「各節ごとに三本の直線文が刻まれ、その両側には、各々一つの円圈をもって眼とし、折れ曲がる方形をもって口とし、直線文をもって額とする、きわめて簡略化された図像が構成される。」これだけであれば、これまでに発見されたなかで最大の良渚文化玉琮というだけで話は終わる。しかし、この玉琮にはそのほかにも文様が彫刻されているのであった。まず上端正中部に夬文が毛髪の子細で陰刻されており、底部内壁には三角形文が刻みこまれているというのである。

さて、この玉琮の性格はどのように位置づけたらよいのであろうか。紹介文の記述がやや大まかで、文様の細かな形態は不明であるが、簡化されたシンボルAであることに違いはなかろう。複節・柱状で器高が高いという全体の形状からみて、寺墩遺跡M1、M3出土の例品にもっとも近く、Ⅵ期に相当する遺物であることが判る。良渚文化Ⅵ期に時期的に併行する蘇北・魯南の文化は大汶口文化花序期であることは先に見た通りである。一方、夬文は山東省の諸城前寨遺跡、莒県大朱村遺跡、莒県陵陽河遺跡採集の土器上の線刻記号としてつとに知られたものである（図35—1～3，^{文6, 18, 20}7）。1～3は破片であるので全体形は不明であるが、7は甕形土器の完形品である。陵陽河遺跡の文化層は早・中・晩の三時期に区分される。問題の甕形土器は考古学的発掘による出土品ではなく、それ以前の採集品であるために、発掘報告書にも言及はなく、所属時期は特定されないままになっている。しかし全体の器形から見る限り、発掘時に晩期墓から出土したやはり有文の甕形土器（図35—5、6）と相同のものであり、したがって、本来は晩期墓の副葬品であったことが判る。ところで陵陽河遺跡晩期墓の年代であるが、報告者が言うとおりの、大汶口文化最末期から典型龍山文化初期にかけてのものであることは出土土器（図36）の形態から明らかである。であるとすると、花序期（大汶口文化中期初頭）とはかなり隔たっていることとなる。実年代にして数百年は降るものであろう。つまり、該器は良渚文化Ⅵ期に太湖地区で製作された玉琮が、その後のある時期に山東省東南部にもたらされ、そこであらためて当時流行の夬文と三角形文を彫り込んだと考えるのがもっとも蓋然性が高い。もしかりに大汶口文化晩期から典型龍山文化初期に当地で製作されたものであるならば、良渚文化の人面文などを描かずに夬文その他の文様をもっぱら描けばよいはずである。この文様があまりにも微細に彫刻されていたために、1958年に購入されてから1987年に至るまでその存在が気付かれずにいたということも、それが製作後に付け足しに彫り込まれたものであることを暗示していよう。ただ一つ疑念が残るのは、報告者の石志廉氏がこの玉琮が深碧色を呈しており、福泉山遺跡出土の黒褐色を呈する玉琮とは異なり、したがって、遼寧産の玉材を用いて山東で製作されたのではないかと推測されていることである。しかしこの推測は根拠薄弱と云うべきである。そもそも、石氏が言及されている福泉山遺跡にも少数ながら緑色の玉器（琮を含む）が立派に存在している。その他、草鞋山遺跡、張陵山遺跡、寺墩遺跡など太湖北辺の諸遺跡では緑色系の玉器が少なからず出土している。玉色をもって製作地特定の根拠とすることは無理である。^{注11}う。

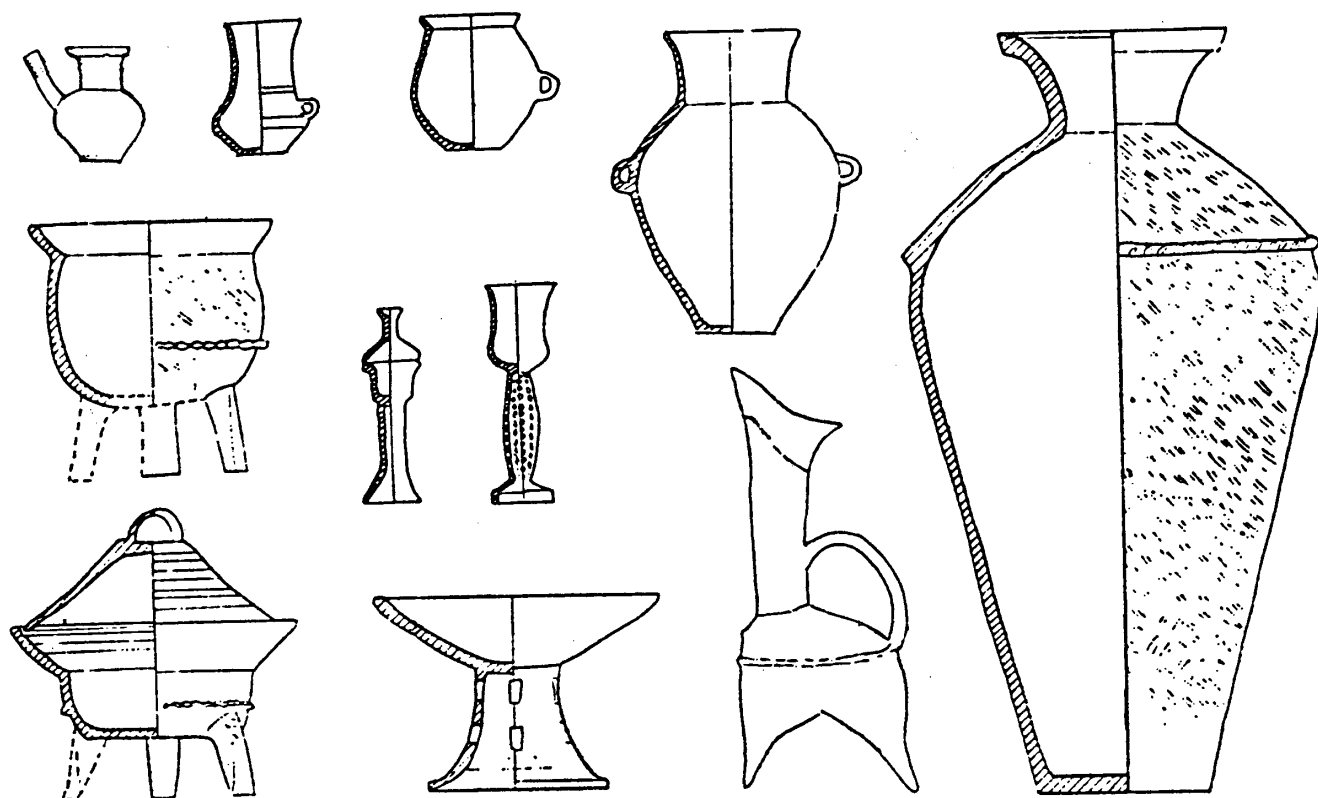


図36 陵陽河遺跡晩期墓出土土器（縮尺 1/10）

話は前後するが、各文土器が採集された諸城前寨遺跡、莒県大朱村遺跡、莒県陵陽河遺跡はいずれも山東省の東南部に位置している。この付近の大都市といえば青島をおいてほかにない。該玉琮が諸城から莒県の近辺で採集あるいは盗掘されたものであるならば、青島に売りに出されるということは十分にありそうなことではある。

各文を持つ玉器としてすぐに想起されるのは米国フリア美術館蔵の腕環（図37—1～3）である。紹介者の林巳奈夫氏はこれを良渚文化のものであるとされる。しかし、やはりこの腕環も大汶口文化の遺物と考えるべきであろう。その第一の理由と

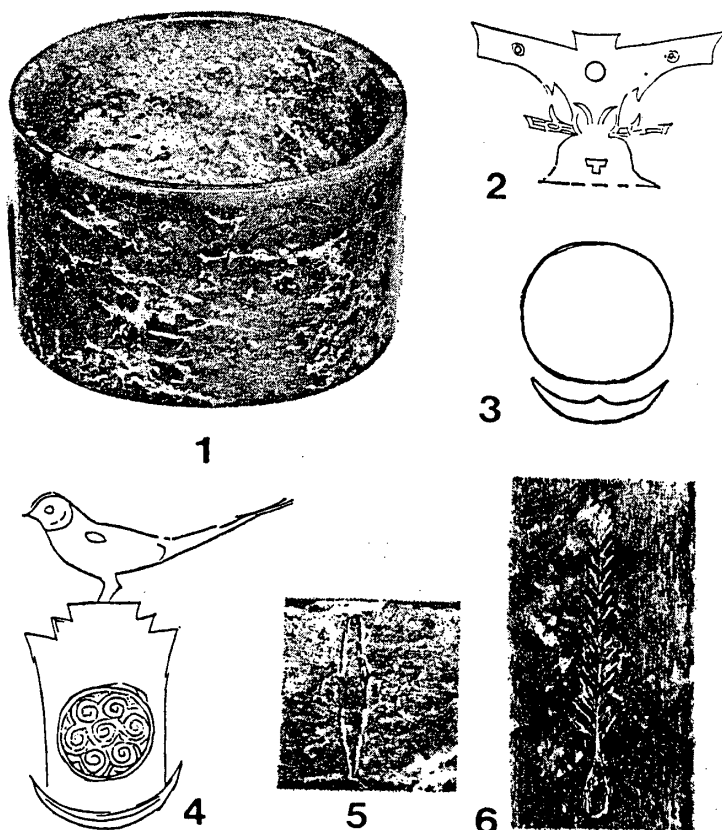


図37 フリア美術館蔵玉器の記号（縮尺不同）

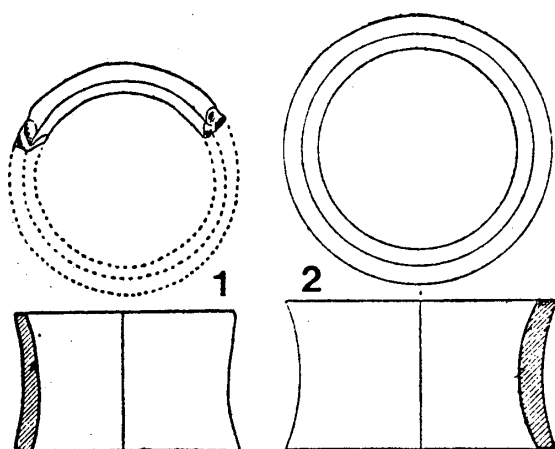


図38 大汶口文化の玉製腕環（縮尺 2/5）

1 景芝鎮M7 2 三里河M279

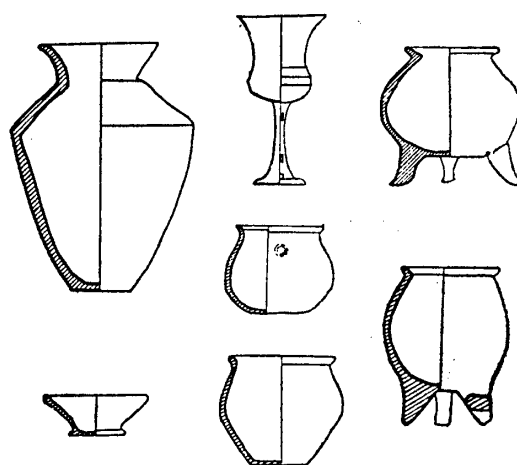


図39 景芝鎮遺跡M7出土土器

（縮尺 1/10）

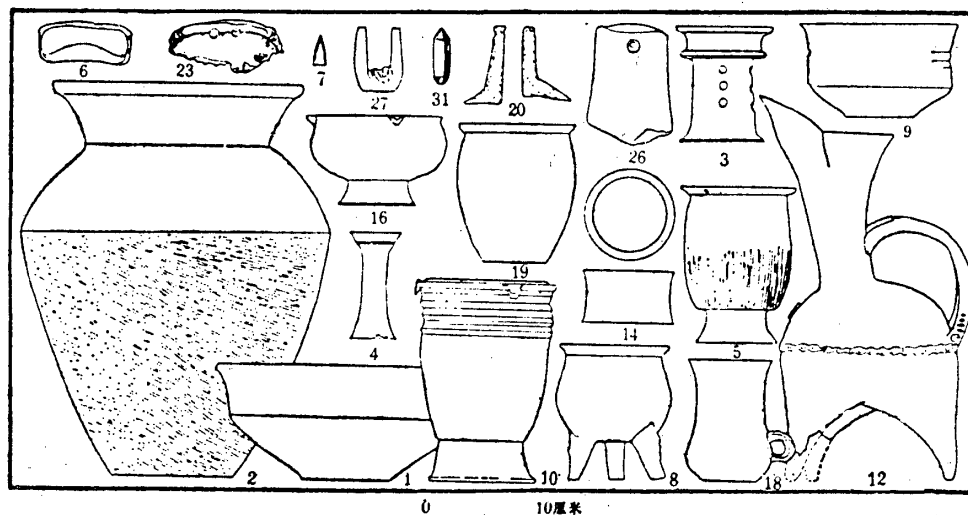


図40 三里河遺跡M279出土土器

しては、呂文はこれまでのところ大汶口文化の土器に刻まれた記号としてしか発見されていないという事実を挙げることができる。一方、良渚文化の玉器は現在までに考古学的な正規の発掘によるだけで、管や珠といった小品まで含めれば、おそらく出土点数は 5,000 点近くに達するであろう。だが、そのうち呂文の刻まれた玉器は 1 点も存在しないのである。次に、やや消極的な理由ではあるが、形態からみた場合、この腕環は良渚文化の例品である可能性も確かにはあるが、大汶口文化晩期の例品である可能性もそれと同じ程度あるということである。該器の特徴は外壁面が内凹していることであるが、同様の形態をとる玉製腕環は山東省安邱景芝鎮遺跡^{文5}M7 あるいは同じく山東省膠県三里河遺跡^{文39}M279 から出土している（図38）。共伴する土器（図39, 40）からみて、前者は大汶口文化末期、後者は大汶口文化最末期、若干典型龍山文化初頭にかかろうかという時期に位置づけられるものである。まさに陵陽河遺跡の年代に等しい。この時期に、外壁面が内凹する腕環と呂文とが合体することは何ら不思議のないことである。

因みに、図37—4の文様を持つフリア美術館蔵の玉璧も林巳奈夫氏によって良渚文化の例品であるとされている。この璧の周縁には図37—5、6に示すような飛鳥と「魚の骨のやうな形」が刻まれているという。^{文66}このうちの後者は陵陽河遺跡出土の甕形土器に刻まれる文様（図35—4）にかなり近似したものである。また、図37—4、5の鳥の文様であるが、前者は羽を休めた鳥の側面観をかなり写實的に写したもので、後者は燕のような飛鳥を俯瞰したものである。いずれも先にみた良渚文化の鳥文の変遷過程の中には収まるべき場所がない。この二つの理由から、やはりこの玉璧も大汶口文化の遺物と考えるてよいであろう。

・安徽省潜山薛家崗遺跡

^{文2}

薛家崗文化の標準遺跡である。新石器時代文化層は第一期から第四期までに区分されている。各期を通じて長江下流域の新石器文化に近い内容を持っている。長江下流域の編年に則して言えば、第一期が馬家浜文化馬家浜期、第二期が崧沢文化崧沢Ⅰ期、第三期が崧沢文化崧沢Ⅱ期、第四期が良渚文化の最末期からその直後の時期にそれぞれ相当する。このうち第三期墓から2点の玉琮が出土している。ただし、図が掲載されているのは1点のみである（図41）。器高 2.1cm、斜径 1.6cm とかなり小さく、良渚文化の例で言えば小玉琮にあたる。上下二節に分かれ、縦方向に浅槽が走っている。獸面文その他の文様は認められない。

薛家崗遺跡第三期が崧沢文化崧沢Ⅱ期にほぼ併行することは土器の形態から言えることである。であるとすると、この玉琮は良渚文化に先行する玉琮、ひいては中国最古の玉琮ということになる。しかし、第三期文化層は「文化層堆積と出土器物の観察から、その継続時間は比較的長い」と報告者は認めており、良渚文化の早い時期にまで降るものが部分的にある可能性も残されている。問題の玉琮が出土したM47からは玉・石器のほかには1点の壺が出ているのみであり、それも図示されていないので、この墓が第三期の中でどのへんに位置づけられるのかを断定することができないのは残念である。

・湖南省安鄉度家崗遺跡

未報告の遺跡であり、詳しい文化内容は把握できない。ただし、いくつかの論文に若干の言及がなされることがあり、それらから、^{文10, 14}総面積約 10,000m²、文化層の厚さ 1.2m前後という規模をもつ新石器時代遺跡であり、主要時期は屈家嶺文化および石家河文化であることが判る。

筆者は1987年12月、湖南省博物館を見学した際、安鄉度家崗遺跡出土品として展示されている1点の玉琮を見ることができた。図42にそのスケッチを示す。全体の色調は黄緑色を呈するが、白色粒子

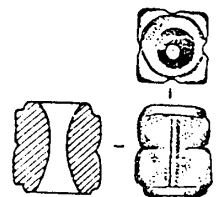


図41 薛家崗遺跡M47
出土玉琮（縮尺 1/2）

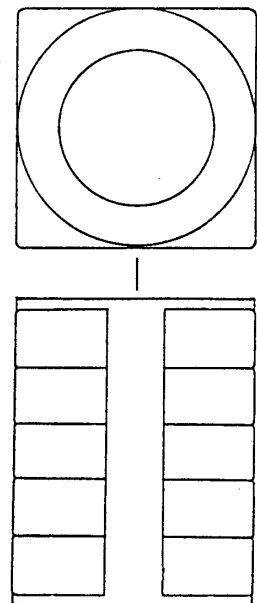


図42 度家崗遺跡出土玉琮
（縮尺 1/2）

が多数混入しており、あまり良質の玉材ではない。全体は5節に分かれ、中央に浅槽が縦走している。上下端には円形の突出部がある。獣面文その他の文様は認められなかった。全体的な印象は良渚文化の玉琮に近いものである。所属時期の判定は報告書の刊行を待って行ないたい。

・江西省樊城堆類型諸遺跡

文76

新余市変電所遺跡および徳安県、靖安県等のいくつかの遺跡で玉琮が出土していることが李家和氏他の執筆になる論文に紹介されている。いずれも樊城堆類型の「土坑竖穴一次葬墓」からの出土であるという。

樊城堆類型というのは江西省の北西部、贛江の流域を主要な分布地域とする新石器時代晩期の文化類型である。有段石斧、有孔扁平石斧、丁字足鼎、瓦状足鼎、直口直頸扁鼓腹壺などの石器、土器に見られる類似性から、良渚文化に近縁なものとされている。ただし、継続時間が比較的長く、良渚文化に若干遅れる遺物群をも含むようである。また一方では広東省の石峡文化との密接な関係も論じられている。玉琮に関する詳細な情報が一切得られない状況なので即断はできないが、やはり良渚文化のものに近いものではなかろうかと推測される。

・広東省石峡文化諸遺跡

広東省内では、いずれも石峡文化に属する四つの遺跡から計10点の玉琮、石琮が発見されている。数量の多さからいえば、良渚文化に次ぐものである。以下、順次それらを見ていくことにしよう。

曲江石峡遺跡は「中間が隆起し、東西に傾斜する小山崗」を成している。上・中・下の三つの文化層からなっており、このうちの下文化層を標式として石峡文化が設定された。この下文化層に属する墓葬は一期から三期に細分される。玉琮およびその他の玉器はすべて三期墓の副葬品として出土したものである。玉琮の出土点数は計6点で、1点ずつ別々の墓から出土している。三期に属するM43出土木炭を試料としての¹⁴C年代測定の結果は4815±185 B P（樹輪校正）となっているが、一期墓であるM79出土木炭からは4680±155 B P（樹輪校正）という年代が得られており、逆転している。おそらく三期墓の年代のほうが古すぎるの

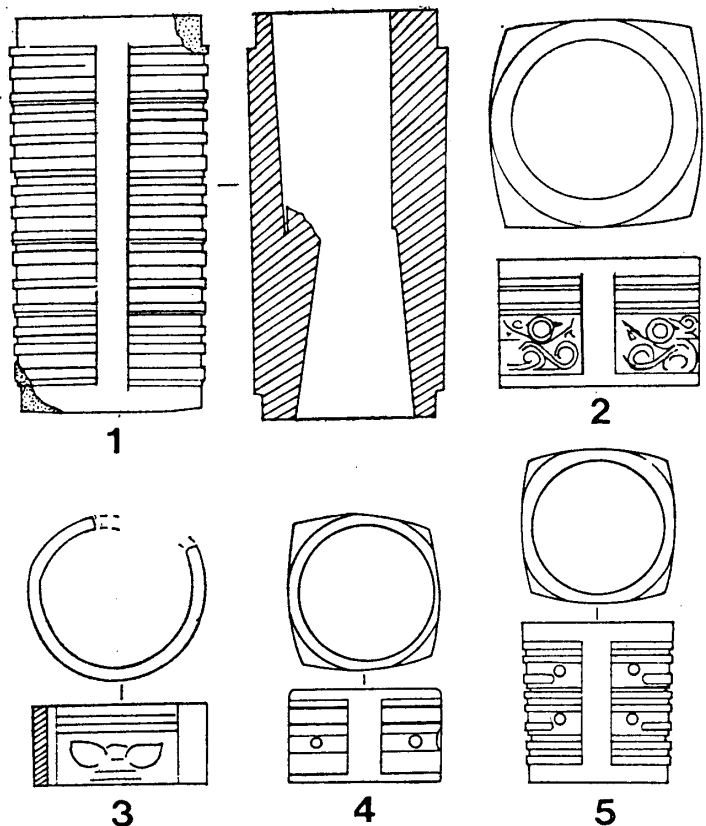


図43 石峡遺跡出土玉・石琮（縮尺不同）

1 M105 2 M17 3~5 不明

であろう。

発掘報告書には6点のうちの2点の不鮮明な写真が掲載されるのみであるが、後に楊式挺氏により5点の実測図が公表された。それを図43に掲げる。1がM105出土品、2がM17出土品であることは判るが、他の3点は何号墓からの出土品であるか不明である。いずれも突出部の断面形が正円あるいはそれに近く、良渚文化玉琮の編年に則して言えば、比較的早い段階のものであることが一目瞭然である。特に2のシンボルBは、小鼻および両脇から伸びる巻き髭状の表現がⅢ期に属する瑤山遺跡M10、M12出土品（図9—4、5）、草鞋山遺跡M199出土品（図10—7）に似ており、時期的な併行関係を示している。3も同じくシンボルBのみを描いている。磨滅したためか文様は不明瞭であるが、やはりⅢ期頃のものとしてよいものである。4、5の2点はかなり簡略化の進んだシンボルAの図像が刻まれている。しかし、突出部の形状がまだ円形に近いことから、Ⅳ期ないしⅤ期の例品と考えておく。1は柱状で、5節からなる。眼鼻の表現は既に失われている。このことから時期を推定するならばⅥ期併行ということになるが、寺墩遺跡M1、M3出土品などと比べると彫りが深く、もう少し遡る可能性もある。

石峡遺跡墓葬の葬法には際立った特色が認められる。一次葬墓、二次葬墓いずれもその多くは墓壙内壁が焼かれているのである。壁面は紅化し、炭化物が壙底に堆積し、あるいは填土中に混入している。このように墓壙を焼く（おそらく、それによって聖化する）という葬法は寺墩遺跡M3においても認められるものである。また、福泉山遺跡において墓壙を覆う紅焼土が見られることもこれに関係していよう。遺物だけではなく葬法という精神文化に関わる領域においても、良渚文化との類似性が指摘し得るのである。

封開鹿尾村（禄美村）遺跡は崗地
文72, 74
上に立地する。表土が流出したため

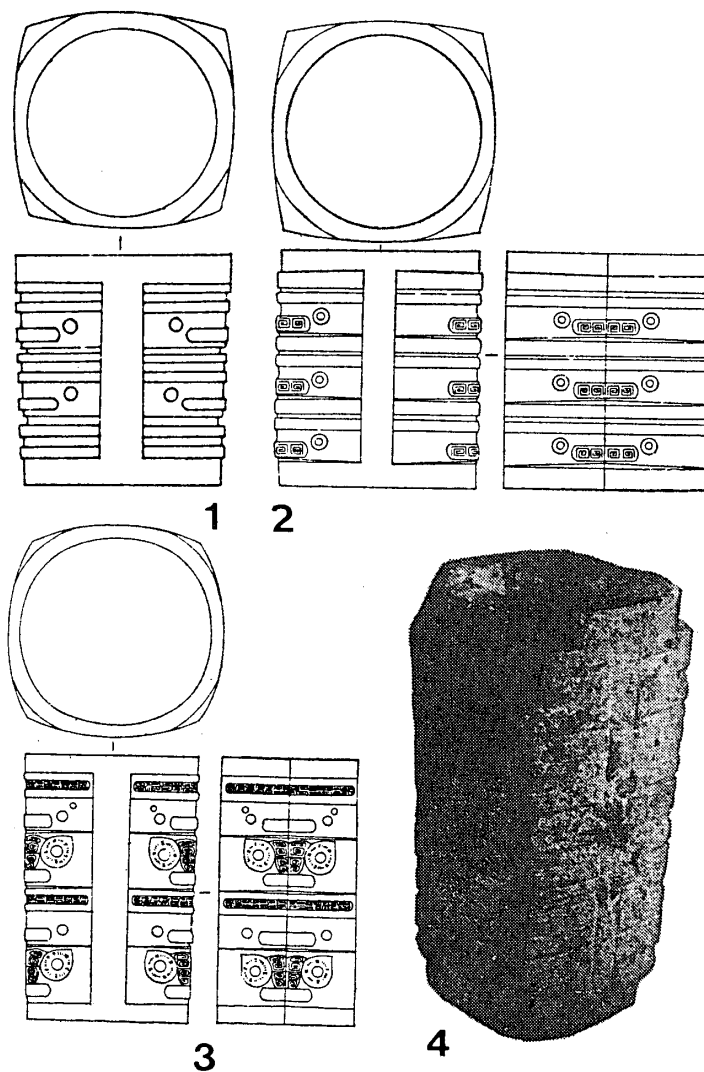


図44 石峡文化の玉・石琮（縮尺不同）

1 鹿尾村M1 2, 3 田壩圩 4 床板様

に発見された長方形土墳墓から1点の石琮(図44—1)が出土している。共伴土器は石峽遺跡下層三期のものと相同であるという。墓墳底部には焼土と灰土が数 cm の厚さに堆積していたことは石峽遺跡墓葬と同様の現象である。この石琮は石峽遺跡出土品(図43—5)と完全に同一の形態を示している。このほか2点の石鐃, 1点の穿孔石斧も同時出土している。同墓内で採集された竹木炭の¹⁴C測定年代は 4030 ± 120 bp である。樹輪校正を施せば 4,500 BP 前後となろう。

海豊田^{文71, 74}墳圩遺跡では付近の農民が石灰を焼成するための貝殻を掘り出していた際に、地表下4 m の深さで2点の玉琮(図44—2, 3)と2点の玉環を掘り当てた。他に遺物はまったく無かったという。したがって、厳密には石峽文化に含めて考えてよいかは問題であるが、ここでは一応、地理的な関係から石峽文化のなかに一括して扱うこととする。

この2点の玉琮は透明感のある透閃石系軟玉製で、その色調は「湖緑」と表現されている。2はシンボルAが三段に、3はシンボルA, Bが一組になり、それが二段に描かれている。良渚文化の早期から中期にかけての玉琮に似るが、2の鼻の区画、3の鉢巻きの間と眉間部分が雷文で埋められていることは良渚文化玉琮には見られない特徴である。

ところで、これらの玉器が発見された貝層というのは自然堆積層なのであろうか、それとも貝塚なのであろうか。4点の玉器以外に遺物が無いということは、そこが墓葬ではなかったことを意味するのであろうか。いずれも不明である。墓の副葬品ではなく埋納遺物であるとすれば、これは他にほとんど類例を見ない特殊なものであると言える。

曲江床板様遺跡もやはり崗地上の遺跡である。2基の石峽文化墓葬が発掘されている。一号墓の^{文74, 77}近辺で採集された60数点の石製品のなかに1点の石琮(図43—4)があった。本来、一号墓に所属するものなのか、あるいは未確認の他の墓葬の副葬品であるのかは決め難いという。

この琮は「灰色珉岩質」で、器高14.6cmを測る。5節から成り、上が広く、下が狭い。写真では不明瞭であるが、各節には簡略化されたシンボルBが描かれている。石峽遺跡 M105 出土品に

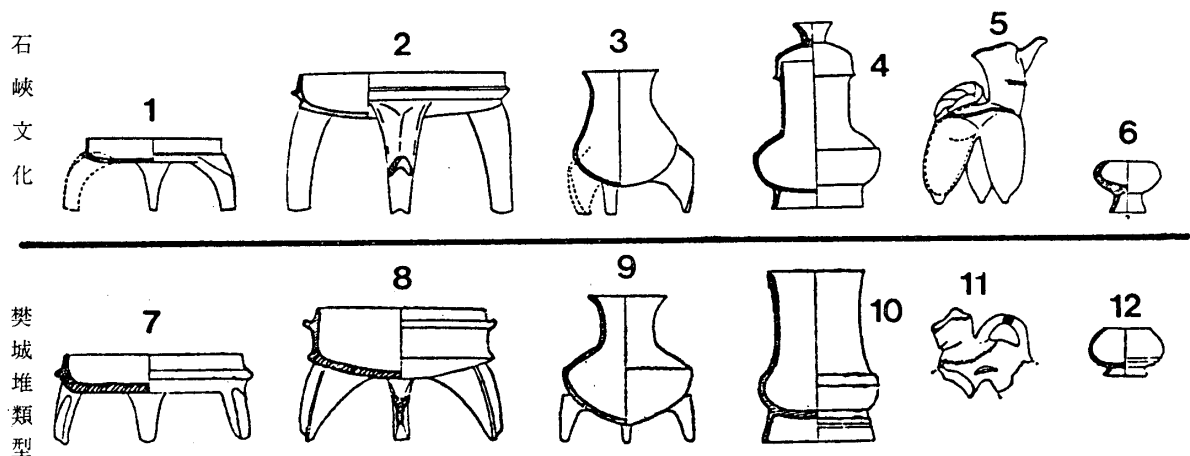


図45 石峽文化と樊城堆類型の土器(縮尺不同)

- 1, 4 石峽遺跡一期墓 2, 3, 5, 6 石峽遺跡三期墓
7, 11 築衛城 8, 9, 12 樊城堆 10 神墩

似るが、それに比べて、より良渚文化玉琮に近いものである。

石峽遺跡下層三期墓を代表とする石峽文化墓葬からは玉琮以外にも璧、瑗、環、玦、璜、垂飾、簪等の様々な玉製品あるいは石製品が出土している。その多くは良渚文化のものと類似しており、両者の密接な関係を物語っている。土器や石器に関しても、両肩に打ち欠きの入る扁平有孔石斧や鬻には良渚文化のそれらと類似したものがある。しかし、良渚文化の遺物よりもさらに近縁な関係にあるのが樊城堆類型の遺物である。図45に両者（石峽遺跡出土品に関しては一期から三期までを含めてある）を対比して示す。一見してその親縁性を見て取ることができよう。

こうしてみると、石峽文化と良渚文化との間にみられる類似性は、両者直接のそれではなく、樊城堆類型を介してのそれであることが理解できる。地理的にみても、樊城堆類型の分布する江西省北西部は両者の中間に位置しているのである（図31）。

・ 山西省襄汾陶寺遺跡

文40, 41

竜山文化陶寺類型の標準遺跡である。文化層は上・下両層に区分される。下層は廟底溝二期文化から河南竜山文化への過渡期、上層は河南竜山文化三里橋類型併行期とされる。うち下層から何点かの玉琮、石琮が出土している（図46）。1は青緑色

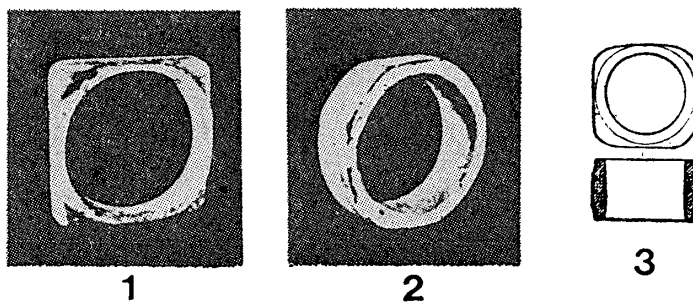


図46 陶寺遺跡出土玉琮（縮尺不同）

1 M271 2 M267 3 M1282

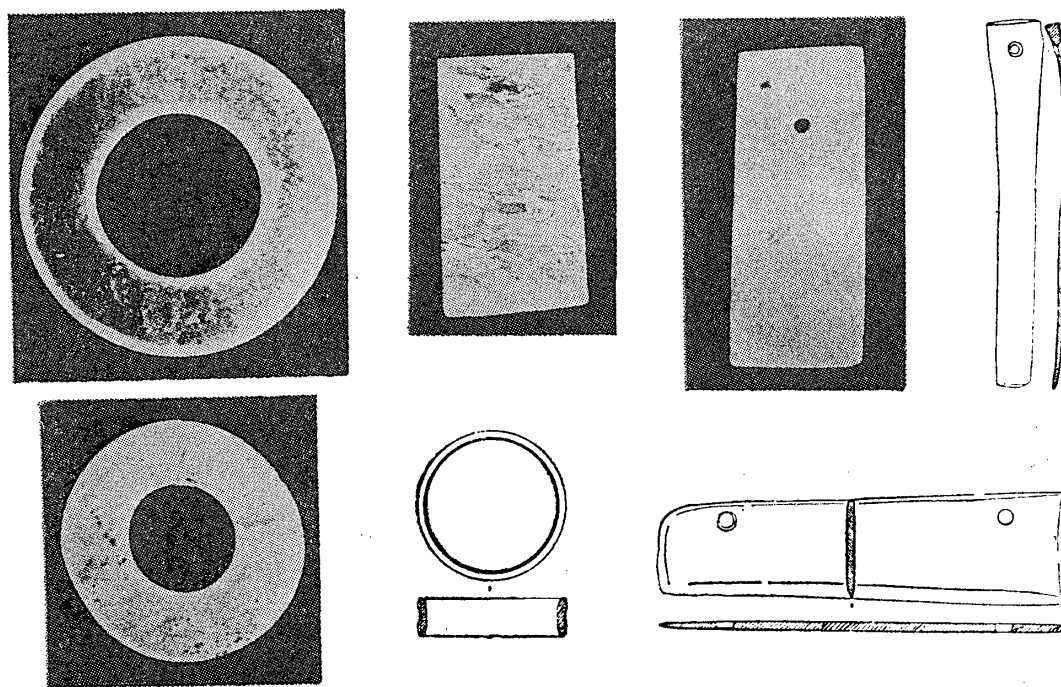


図47 陶寺遺跡出土玉器（縮尺不同）

の玉質で短円筒に方角の鐐がめぐるといった形である。外辺長、内径いずれも 6 cm、高さ 1.3cm となっている。2 は青白色の玉質で、外壁面には堅槽と弧面とが交互に四つずつ並んでいる。弧状の面にはそれぞれ三条の溝が刻まれている、外径 6 cm、内径 5.2cm、高さ 2.6cm である。3 は白色の石質で、外辺長 5 cm、内径 3.9cm、高さ 2.9cm を測る。1 の例品に似た形状を示している。この他にも何点かの石琮が出土しているようであるが、説明は省略されており、図示もされていない。

これらの琮は、その形態、文様いずれをとっても良渚文化系列の玉琮とはかなり隔たりのあるものである。土器や石器にしても、良渚文化のものとはおよそかけ離れている。したがって、両者の間に何らかの文化史的関係を想定することは困難であろう。しかし、玉琮という特殊な玉器のアイデアそのもののまでが独立に発生したかどうかはまた別問題である。

なお、同遺跡からは玉琮以外にも図47に載せるような各種の玉器が出土していることを付け加えておく。

・陝西省延安芦山峁村遺跡

文13

付近の住民が土取り、柴刈りの作業を行っている際に 9 点の玉器を発見し、その後、延安地区群衆美術館の館員がさらに 14 点の玉器を徴収した。玉器以外の共伴出土遺物は 1 点の石犁（図49—1）のみである。ただし、玉器出土地点の近傍で竜山文化晩期の遺溝、遺物が発見されており、それと同時期のものである可能性があるため、ここでとり上げることにする。

玉琮は 2 点発見されている（図48）。1 は翡翠色で、墨緑色の斑点が混じる。器高 4.4cm、外径 7 cm、厚さ 0.3cm である。四隅に高さ 3.1cm の三角形の突起が設けられ、そこには直線文を挟んで上下に「饕餮文」が描かれているという。2 は乳白色で、茶褐色の斑点が混じる。器高 4.4cm、外径 7 cm、厚さ 0.3cm である。やはり外方内円形を呈する。外表面は上下両層に分かれ、上層には 3 条、下層には 2 条の凸出する直線文が刻み出されている。また、三角形の突出部には上下両段に「象徴獣面文」が飾られている。

外方内円の器体に上下二段に「饕餮文」なり「象徴獣面文」なりが描かれる。これはまさに良渚式の玉琮の特徴に他ならない。いったいこれはどのように解釈されるべきであろうか。まず一つには、歴史時代のある時期に長江下流域で偶然に発見された玉琮が、何らかの理由によってこの地にまでもたらされ、再度埋納された、という可能性が考えられよう。しかし共伴する他の玉器（図49）はかならずしも良渚文化に特徴的なものではないことから、複数の地域の遺物がここに集められたと考えねばならない。また、石犁といった石器までわざわざ持ち込むというのも不自然である。であるとすれば、もう一つの可能性、すなわち、新石器時代晩期に確かにこうした玉器のセットがこの地に存在していた、ということがクローズアップされてこよう。

もう一度玉琮以外の玉器に目を転じてみよう。一見して気付くことであるが、山西陶寺遺跡出土の玉器（図47）にきわめてよく似ている。また石犁（図50—1）も陶寺遺跡出土品（図50—2、3）と相同のものである。芦山峁村遺跡と陶寺遺跡とは約 200km 隔たっている。確かに小さから

中国新石器時代の玉琮

ぬ距離ではあるが、良渚文化と石峽文化との関係を考えれば、取るに足らない距離であるとも言える。新石器時代晩期に山西西南部から陝西中北部にかけて同類の玉器文化が広がっていたと推定してよいのではなかろうか。

さて、最後に残されたのが

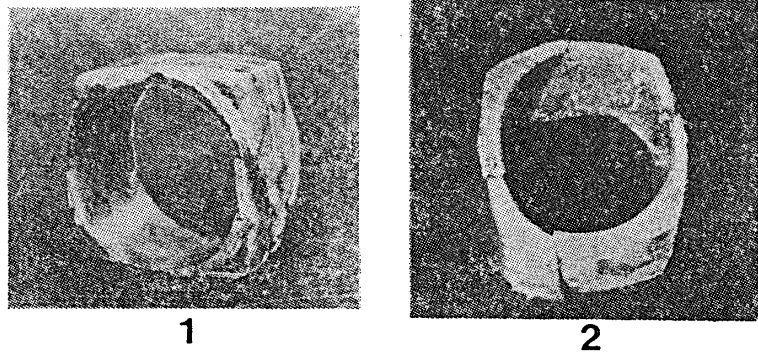


図48 芦山峁村遺跡出土玉琮（縮尺不同）

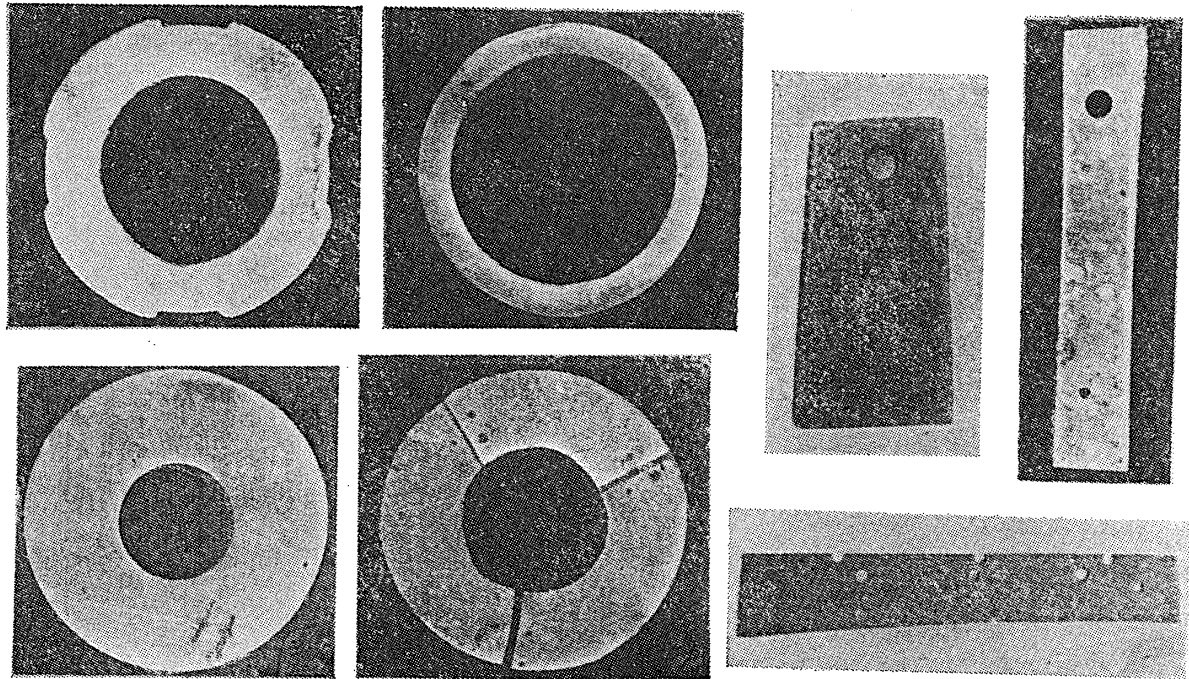


図49 芦山峁村遺跡出土玉器（縮尺不同）

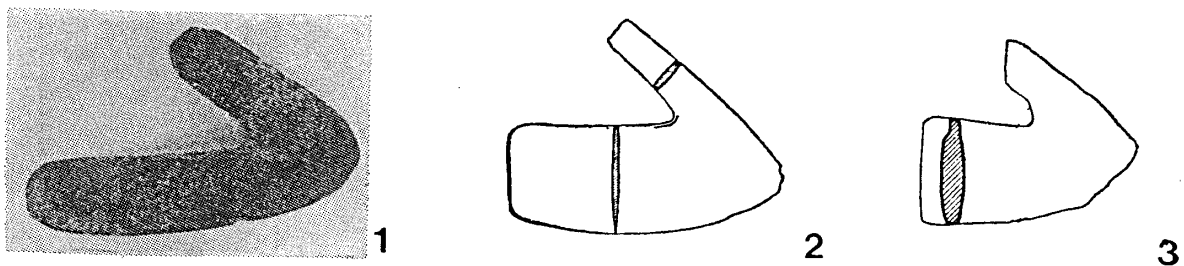


図50 芦山峁村遺跡，陶寺遺跡出土の石犁（縮尺不同）

1 芦山峁村

2 陶寺M3015

3 陶寺採集

良渚式玉琮の問題である。陶寺遺跡上層の年代はおそらく紀元前2000年前後に置かれるであろう。^{文17}
これは良渚文化の最末期か、あるいは良渚文化が既に終了している時期に当たる。少なくとも、断面形が正円形で、シンボルがしっかりと描かれる時期からは数百年は経っていよう。芦山峁村遺跡の年代が陶寺遺跡上層に併行すると考えてよいならば、良渚文化の分布域内で製作されてからある程度の時間が経過したものが、なんらかの契機によってこの地にまで伝えられたとするのが妥当であるということになる。

新石器時代の黄河中流域の玉器文化はまだ研究の緒についたばかりである。二里頭文化以後の玉器の淵源を探る上にも、今後ますます研究を押し進めていかねばならないであろう。

以上、中国各地出土の玉琮を概観してきた。ここで、あらためてまとめをしておこう。

中国最古の玉琮の名誉を担う最有力候補は安徽薛家崗遺跡出土品であるが、良渚文化併行期にまで降る可能性が無くなったわけではない。また今後、長江下流域の崧沢文化の中に、良渚文化の玉琮の祖形となるものが見出されることも十分にあり得よう。江蘇省内の青墩、花厅両遺跡出土品は良渚文化の玉琮そのものである。時期的な併行関係も確かである。同じく良渚文化に併行することが明らかなのが石峽文化諸遺跡出土品である。ただし、石製のものがみられること、良渚文化の玉器には無い文様を持つものがあることなどから、良渚文化製品そのものの移入ではなく、それを見知った者が在地で製作した可能性が大きい。江西樊城堆類型の諸例はいずれも正式な報告がなく、その詳細を知ることはできないが、時期的に良渚文化に重なることは間違いない。玉琮自体が良渚文化からの搬入品であるかどうかは今のところ断定はできない。山東大汶口文化の例品は良渚文化に遅れるものであり、在地での発展形を思わせる。湖南出土の例品もやはり良渚文化よりは降る可能性が強い。山西、陝西の新石器時代文化が良渚文化と何らかの交渉をもっていた証拠はまったく無いといえるが、ただ一つ玉琮のみは、そのアイデアが何らかの経路を辿って伝えられたものかもしれない。

こうしてみると、新石器時代における中国各地の玉琮は多かれ少なかれ良渚文化との関係を有するものであることが判る。換言すれば、長江下流域が玉琮に代表される玉器文化の放射の中心地であったのである。その意味において、当時の中国において“中原”の地位を占めていた、と言っても過言ではあるまい。

一方、社会の進化段階という見地から見た場合、玉琮に代表される単なる装飾品の域を越えた玉器を持つ社会というものはどのように位置づけられるのであろうか。かつて筆者は、長江下流域の^{文47}新石器時代文化を通時的に分析した際に、良渚文化の直前の時期、すなわち崧沢文化崧沢Ⅱ期の段階で耕起具としての石犁が、そして良渚文化期には破土器、耕田器が出現することから、この時期を画期として男性が農作業に専ら従事するようになった、つまり栽培の形態が園耕から農耕へと転換したと考え、結局はそこから不可逆的に社会の階層化が進むとした。ところで、陶寺遺跡、芦山峁村遺跡出土の「石犁」は良渚文化の破土器と瓜二つのものである。その出現の背後には長江下流域の場合と同じ社会的変化が連動していたと考えてよいであろう。その他の地域では園耕から農耕

への転換を特定することは難しいが、かなり階層化の進んだ社会であることは、墓葬のありかた一つを見るだけでも明らかである。つまり、身分の分化の進行した社会になって初めて、装飾品の域を越えた玉器が現れるということである。そうした社会において玉器は特定身分の象徴、すなわちレガリアとして機能していたのである。

4. おわりに

筆者は本稿を草するに当たり、正規の考古学的発掘によって出土した遺物を研究の中心に据えるよう努めた。なぜならば、博物館や美術館に収められた遺物は、その鑑賞的な価値はともかくとしても、考古学的にはきわめて乏しい情報量しか持たないのが普通であり、逆にそのことが根拠のない憶測を生み出す原因ともなるからである。この目論見は一応成功したようである。良渚文化玉琮の編年は相伴土器の編年に基づくことによって初めて説得力を持つものとなった。玉琮が男性に付属する器物であること、複節・柱状の玉琮が琮形管からの発展形であることなども、発掘遺物を扱うことによってのみ明らかにしえたものである。今後、発掘調査の進展に伴って、玉琮に関して、そして、玉琮を持つ社会に関して、我々の知識がますます充実してゆくことを祈りつつ筆を擱くこととする。

〔付記〕

1987年9月から1989年8月までの約2年間、筆者は北京大学考古系の留学生として中国考古学を学ぶ機会を持つことができた。その間、指導教授の嚴文明先生をはじめとする諸先生方には様々な形で御教示に与かり、また御助力を賜った。良渚文化研究に限って言うならば、特に以下の方々から賜った学恩はきわめて大きなものであった。文末ながらここに記して感謝の意を表す一助としたい。

牟永抗、王明達（浙江省文物考古研究所）、黄宣佩、孫維昌、宋建、張明華（上海博物館）、陳晶（常州市博物館）、紀仲慶、鄒厚本（南京博物院）（以上敬称略）

注

- 1) 荷葉地遺跡および蟬山遺跡において玉琮が出土していることは牟永抗、王明達両氏から、また高城墩遺跡に関しては陳晶氏から御教示を得た。
- 2) 余杭吳家埠遺跡では近年の発掘で良渚文化墓葬同士の切り合い関係が確認されていることを王明達氏から教示された。また、福泉山遺跡第3次調査においても、良渚文化墓葬の切り合い関係が存在することが明らかになっている（文26）。
- 3) 本来、このような嘴状の注ぎ口は“流”と称すべきであり、したがって帶流土器とでも呼ぶのが相応しいが、日本語としては熟していないため、ここでは注口土器とする。
- 4) 南京博物院は1979年に発表した論文（文50）で、崧沢類型と良渚類型の間に張陵山類型を独立させているが、翌年にはこれを撤回し（文52）、張陵山類型を良渚文化の範疇内に含めている。以後その立場に変わりはない。

- 5) 筆者は1988年12月、上海市青浦県博物館でこの注口土器を実見することができた。他の例品に比べてかなりこぼりであり、実用品であるかどうかは疑わしい。口縁部が欠失していたものを補修してあるが、その際に平縁にしている。本来は、口縁が嘴状に上方へ伸びていたはずである。
- 6) 林巳奈夫氏の表現法(文65)を借用した。
- 7) 林巳奈夫氏はこの額部分の文様を河姆渡文化からの伝統を受け継ぐ「太陽神の炎形の熱気の形」とであるとされる(文67)。
- 8) 報告書には断面図が載せられていないが、筆者は1987年9月、北京故宮博物院で該器を実見したが、突出部の形状は円形であった。
- 9) 太湖湖岸で農民が地下2.5mの深さから掘り出したものである。その他の遺物は無かったという。
- 10) 安志敏氏は、この玉琮は寄贈者の尹健一なる人物が青島で購入したものであるとの情報を北京大学張伝璽氏から得たことを記している(文1)。
- 11) ここで石志廉氏が「福泉山遺跡」と言っているのは寺墩遺跡の誤りではなかろうか。複節・柱状ということでは寺墩遺跡出土品にもっとも近いものであり、それと比較するのが適当である上に、同遺跡からは確かに多くの黒褐色の玉琮が出土している。しかし、これは加熱を受けたために変色したものであり、その点の考慮が必要である。

文 献 — 覧

- 1) 安志敏 1988 「關於良渚文化的若干問題——為紀念良渚文化發現五十周年而作」『考古』1988—3
- 2) 安徽省文物工作隊 1982 「潜山薛家崗新石器時代遺址」『考古學報』1982—3
- 3) 衛聚賢 1936 「吳越考古集誌」『説文月刊』1—3
- 4) 王巍 1986 「良渚文化玉琮趣議」『考古』1986—11
- 5) 王思礼 1959 「山東安邱景芝鎮新石器時代墓葬發掘」『考古學報』1959—4
- 6) 王樹明 1986 「談陵陽河与大朱村出土的陶尊“文字”」山東省《齊魯考古叢刊》編輯部(編)『山東史前文化論文集』齊魯書社
- 7) 汪遵国 1983 「略論良渚文化」『南京博物院集刊』6
- 8) ——— 1984 a 「良渚文化的“玉斂葬”——兼談良渚文化是中国古代文明的淵源之一」『南京博物院集刊』7
- 9) ——— 1984 b 「良渚文化“玉斂葬”述略」『文物』1984—2
- 10) 何介鈞 1986 「洞庭湖区新石器時代文化」『考古學報』1986—4
- 11) 葛治功 1988 「從上海福泉山遺址的考古發現談我国古代有關於天活動的幾個問題」『東南文化』1988—2
- 12) 広東省博物館、曲江県文化局石峡發掘小組 1978 「広東曲江石峡墓葬發掘簡報」『文物』1978—7
- 13) 姬乃軍 1984 「延安市發現的古代玉器」『文物』1984—2
- 14) 湖南省博物館 1979 「三十年来湖南文物考古工作」文物編輯委員會編『文物考古工作三十年』文物出版社(邦訳 関野雄監訳『中国考古学三十年』平凡社)
- 15) 呉国良 1987 「江蘇呉江県首次出土玉琮」『考古』1987—2
- 16) 黄宣佩、張明華 1987 「上海青浦福泉山遺址」『東南文化』1987—1
- 17) 高天麟、張岱海、高煒 1984 「竜山文化陶寺類型的年代与分期」『史前研究』1984—3
- 18) 山東省考古所、山東省博物館、莒県文管会 王樹明 1987 「山東莒県陵陽河大汶口文化墓葬發掘簡報」『史前研究』1987—3
- 19) 山東省博物館、聊城地区文化局、茌平県文化館 1978 「山東茌平県尚莊遺址第一次發掘簡報」『文物』1978—4

- 20) 山東省文物管理处, 済南市博物館(編) 1974 『大汶口新石器時代墓葬發掘報告』文物出版社
- 21) 常熟市文物管理委员会 1984 「江蘇常熟良渚文化遺址」『文物』1984—2
- 22) 車広錦 1987 「良渚文化玉琮紋飾探析」『東南文化』1987—3
- 23) 上海市文物保管委員会 1962 「上海市松江県広富林新石器時代遺址の試掘」『考古』1962—9
- 24) ————— 1984 「上海福泉山良渚文化墓葬」『文物』1984—2
- 25) ————— 1986 「上海青浦福泉山良渚文化墓地」『文物』1986—10
- 26) ————— 1987 「福泉山遺址第三次發掘的重要發現」『東南文化』1987—3
- 27) 周曉陸, 張敏 1984 「治玉説——長江下游新石器時代三件玉制品棄余物的研究」『南京博物院集刊』7
- 28) 周南泉 1984 「故宮博物院藏幾件新石器時代飾紋玉器」『文物』1984—10
- 29) ————— 1985 「試論太湖地区新石器時代玉器」『考古与文物』1985—5
- 30) 石興邦 1986 「山東地区史前考古方面的有關問題」山東省《齊魯考古叢刊》編輯部(編)『山東史前文化論文集』齊魯書社
- 31) 石志廉 1987 「最大最古の多紋碧玉琮」『中国文物報』1987年10月1日
- 32) 浙江省嘉興県博物・展覽館 1974 「浙江嘉興雀幕橋發現一批黑陶」『考古』1974—4
- 33) 浙江省博物館 1979 「三十年来浙江文物考古工作」文物編輯委員会編『文物考古工作三十年』文物出版社(邦訳 関野雄監修『中国考古学三十年』平凡社)
- 34) 浙江省文物考古研究所 1986 「浙江余杭反山發現良渚文化重要墓地」『文物』1986—10
- 35) ————— 1988 「余杭瑶山良渚文化祭壇遺址發掘簡報」『文物』1988—1
- 36) 浙江省文物考古研究所反山考古隊 1988 「浙江余杭反山良渚墓地發掘簡報」『文物』1988—1
- 37) 蘇州博物館, 崑山県文管会 1988 「江蘇省崑山県少卿山遺址」『文物』1988—1
- 38) 中国社会科学院考古研究所(編) 1983 『中国考古学中碳十四年代数据集 1965—1981』文物出版社
- 39) ————— 1988 『膠県三里河』文物出版社
- 40) 中国社会科学院考古研究所山西工作隊, 臨汾地区文化局 1980 「山西襄汾県陶寺遺址發掘簡報」『考古』1980—1
- 41) ————— 1983 「1978—1980年山西襄汾陶寺墓地發掘簡報」『考古』1983—1
- 42) 中国地質科学院地質研究所 閻広 1986 「蘇南新石器時代玉器的考古地質学研究」『文物』1986—10
- 43) 鎮江博物館 1985 「江蘇丹陽王家山遺址發掘簡報」『考古』1985—5
- 44) 張明華 1989 「良渚玉戚研究」『考古』1989—7
- 45) 陳淳, 張祖方 1986 「磨盤墩石鈎研究」『東南文化』第二輯
- 46) 鄭健 1983 「江蘇吳県新石器時代遺址出土的古玉研究」『考古学集刊』3
- 47) 中村慎一 1986 「長江下流域新石器文化の研究——栽培システムの進化を中心に——」『東京大学文学部考古学研究室紀要』5
- 48) ————— 1990 「良渚文化の墳丘墓」(未発表)
- 49) 南京鉱産地質研究所 鄭健 1986 「吳県張陵山東山遺址出土玉器鑑定報告」『文物』1986—10
- 50) 南京博物院 1978 「長江下游新石器時代文化若干問題的探析」『文物』1978—4
- 51) ————— 1980 a 「江蘇吳県草鞋山遺址」『文物資料叢刊』3
- 52) ————— 1980 b 「太湖地区的原始文化」『文物集刊』1
- 53) ————— 1981 a 「江蘇武進寺墩遺址的試掘」『考古』1981—3
- 54) ————— 1981 a 「江蘇邳県大墩子遺址第二次發掘」『考古学集刊』1
- 55) ————— 1982 b 「江蘇越城遺址的發掘」『考古』1982—5
- 56) ————— 1982 b 「江蘇吳県張陵山遺址發掘簡報」『文物資料叢刊』6
- 57) ————— 1983 「江蘇海安青墩遺址」『考古学報』1983—2
- 58) ————— 1984 「1982年江蘇常州武進寺墩遺址的發掘」『考古』1984—2
- 59) 南京博物院花庁考古隊 1988 「江蘇新沂花庁遺址1987年發掘紀要」『東南文化』1988—2

- 60) 南京博物院, 吳縣文管會 1985 「江蘇吳縣澄湖古井群的發掘」『文物資料叢刊』9
- 61) 南京博物院, 崑山縣文化館 1984 「江蘇崑山綽墩遺址的調查与發掘」『文物』1984—2
- 62) 南京博物院, 丹徒縣文教局 1985 「江蘇丹徒磨盤墩遺址發掘報告」『史前研究』1985—2
- 63) 南京博物院, 丹徒縣文物保管所 1986 「江蘇吳縣張陵山東山遺址」『文物』1986—10
- 64) 林巳奈夫 1969 「中国古代の祭玉瑞玉」『東方學報』40
- 65) ——— 1979 a 「先殷式の玉器文化」『MUSEUM』334
- 66) ——— 1979 b 「中国古代の酒甕」『考古學雜誌』65
- 67) ——— 1981 「良渚文化の玉器若干をめぐって」『MUSEUM』360
- 68) ——— 1984 「所謂饕餮文は何を表はしたものか」『東方學報』56
- 69) ——— 1988 「中国古代の玉器, 琮について」『東方學報』60
- 70) 牟永抗 1986 「良渚發掘五十周年之回顧」(未發表)
- 71) 毛衣明 1985 「海豐縣田墘圩發現新石器時代玉器」『中国考古學年鑑1985』
- 72) 楊式挺 1985 「封開縣鹿尾村新石器時代墓葬」『中国考古學年鑑1985』
- 73) ——— 1986 「廣東新石器時代文化及相關問題的探討」『史前研究』1986—1, 2
- 74) ——— 1988 「石峽文化類型遺存的內涵分布及其与樊城堆文化的關係」廣東省博物館, 曲江縣博物館編『紀念馬壩人化石發現卅周年文集』文物出版社
- 75) 余杭縣文物管理委員會辦公室 1988 「浙江省余杭縣安溪瑤山12号墓考古簡報」『東南文化』1988—5
- 76) 李家和, 劉詩中, 黃水根 1986 「江西新石器時代文化類型綜述」江西省考古學會(編)『江西歷史文物江西省考古學會成立大会暨學術討論會文集』
- 77) 劉成德 1988 「曲江烏石床板樣發現的石峽文化遺存」廣東省博物館, 曲江縣博物館編『紀念馬壩人化石發現卅周年文集』文物出版社

図版出典一覧

- | | |
|------------------------------------|---------------------------------|
| 図1 筆者作成 | 図21 文58 |
| 図2 筆者作成 | 図22 文21, 24, 35, 36, 63 |
| 図3 筆者作成 | 図23 筆者作成 |
| 図4 文24 | 図24 筆者作成 |
| 図5 文9, 56 | 図25 文25, 35, 36 |
| 図6 文60 | 図26 文27 |
| 図7 文25 | 図27 文21, 25, 35, 37, 56, 58, 63 |
| 図8 文36 | 図28 文62 |
| 図9 文35 | 図29 文58 |
| 図10 文9, 15, 21, 33, 37, 51, 61, 63 | 図30 文62 |
| 図11 文51 | 図31 筆者作成 |
| 図12 文25, 51 | 図32 文25, 54 |
| 図13 文25, 58 | 図33 筆者作成 |
| 図14 文53, 58 | 図34 文31 |
| 図15 文44 | 図35 文6, 18, 20 |
| 図16 文35, 36 | 図36 文18 |
| 図17 文36 | 図37 文67 |
| 図18 文24, 25, 35, 36, 51, 60 | 図38 文5, 39 |
| 図19 筆者作成 | 図39 文5 |
| 図20 文9, 35 | 図40 文39 |

中国新石器时代的王琮

图41 文 2
图42 筆者作成
图43 文73
图44 文74, 77
图45 文12, 76

图46 文40, 41
图47 文40, 41
图48 文13
图49 文13
图50 文13, 40, 41

中国新石器時代的玉琮

中 村 慎 一

○前言

到了新石器時代後期，以長江下流域為主的中国各個地区，新出現了一批不單純屬於裝飾品的玉器，那就是玉琮和玉璧。玉琮、玉璧的特有者屬於一個特殊的階層，人数很有限。就這一點來說，這些玉器可能是作為象徵那些人特定身份的物品，被当作權力的象徵物来使用的。由此看来，玉璧、玉琮的出現，在玉器的發展史上可謂是一個本質性的飛躍。

本文專門圍繞玉琮進行論述，玉琮之所以比玉璧具有更加複雜的形狀，就是因為它比玉璧具有更多的屬性，而具有更多的屬性，就能為我們今天的研究提供更多的資料。以下，就玉琮的分期、分布、性能、用途、制作方法等進行探討。

○玉琮的分期

对良渚文化進行分期的最有力的遺物是帶流陶器。它的变化過程十分清楚，具体可以分為五期（圖2）。以帶流陶器的分期為依拠，進一步对玉琮進行型式学的分析，筆者認為良渚文化的玉琮以細分為六期（Ⅰ期～Ⅵ期）。

屬於Ⅰ期的是張陵山遺址M4和瑤山遺址M9的隨葬品。Ⅱ期以反山遺址M6，M12，瑤山遺址M7的隨葬品為代表。Ⅲ期包括瑤山遺址M12，草鞋山遺址M199，寺墩遺址M4的隨葬品。Ⅳ期包含有福泉山遺址T4M6，T27M2的隨葬品。Ⅴ期的特徵以福泉山遺址T22M5，草鞋山遺址M198Ⅰ的隨葬品為最典型。屬於Ⅵ期的是福泉山遺址T15M3，T23M2，寺墩遺址M1，M3的隨葬品。良渚文化本身自這Ⅵ期以後繼續往下發展，但從現在所見的玉琮来看，其發展的最後階段就是Ⅵ期。玉琮的剖面形狀，人面紋，獸面紋，鳥紋等都随着時間推移而發展变化，圖19即是各期形狀，紋飾的示意圖。

許多研究者一直把屬於一個集團墓地的全部墓葬判定屬於同一時期，其實這種觀點是錯誤的。一個墓地往往有幾個時期的墓葬共存。譬如，瑤山遺址的墓葬包括Ⅰ～Ⅳ期，反山遺址的墓葬包括Ⅱ～Ⅳ期，草鞋山遺址的墓葬包括Ⅲ～Ⅴ期，福泉山遺址的墓葬包括Ⅳ～Ⅵ期，寺墩遺址的M4屬於Ⅲ期，而M1，M3屬於Ⅵ期。這些墓地的持續時間都相當長。

○玉琮的性能，用途

良渚文化的玉琮除吳江縣王焰村出土的一件以外，全部為隨葬品。從而，只有通過聯系墓葬進行分

析，才能推測這些器物的性質和用途。

在瑤山遺址，琮以及琮形管全部出土於位於南邊一排的墓葬之中，這一排墓中除琮及琮形管外，還發現三叉狀器，錐形飾，鉞等，因此發掘者認定這是男性的墓葬。聯系其它良渚文化的墓葬進行分析，筆者也認為隨葬玉琮的墓極可能是男性墓。玉琮既然是屬於男性的器物那麼，那種根拠玉琮是由玉鐏發展而來，因此玉琮與女性有關係的觀點就被否完了。

瑤山遺址12座墓葬中共有的一個典型特徵是全部隨葬品中沒有發現一件玉璧，而與瑤山遺址僅相隔5公里的反山遺址，在屬於與瑤山遺址墓葬時期大到相同的11座墓葬里，共發現125件玉璧，這兩個遺址的墓葬在是否隨葬玉璧這一點上完全不同。這是什麼原因呢？筆者認為關鍵在於瑤山遺址所處的地形及它的用途。瑤山遺址位於天目山脈南側的小山上，此遺址先是作為祭壇來使用的，後來才改為墓地。把祭祀的場所安排山上，應該認為其目的是為了祭天。而與祭天儀式有關係的人後來大概就被埋葬在那里了。如果根拠他們死後，隨葬品僅有玉琮沒有玉璧這一點，是否可以推測玉琮具有祭天的禮器的作用，這是否又證明當時存在着與《周禮·春官·大宗伯》所言“以蒼璧禮天，以黃琮禮地”全然不同的祭祀體系呢。

小玉琮是玉鉞的裝飾品，這些玉器的用途已經搞清楚了，但玉琮究竟是如何使用的到現在還沒有定論。單節的玉琮是由玉鐏發展而來的，而那種多節、呈柱狀的玉琮則是由琮形管發展而來的，後者在使用時大概與琮形管同樣，是要穿繩的，寺墩遺址M3的出土狀況（圖21）似乎再現了當時的使用方法。

玉琮的節數是否有某種特定的意義呢？通過分析寺墩遺址M3出土的31件玉琮的分布狀況（圖24），筆者認為當時沒有按玉琮節數的奇數、偶數，或者是某個特定數的倍數來安放的規定。從而筆者認為，節數可能沒有什麼特定的含義。

○玉琮的原材料和制作方法

研究者們推測良渚文化玉器的玉石產地大概在寧鎮地區，通過發掘丹徒磨盤墩遺址，證明這是當時制作玉器的場所，這個發現，為以上的推測提供了有力的証拠。

從玉器表面殘留的痕跡來看，筆者認為當時切割玉時不是用圓盤，而是用弓鋸。在張陵山東山遺址M1出土的玉璧（圖27—5）上殘留着被切割的痕跡，其凹痕在弧線的外側，這是使用的弓鋸鋸過的明証，如果使用圓盤法的話，其凹痕應該在弧線的內側。

穿孔則用鑽頭鑽和管鑽，前者用於穿小孔，後者用於穿大孔。在有些良渚文化的玉琮的孔內壁殘留着段，如圖29所示，筆者認為這個段和圓心本來應該是相聯的，如果將其折斷的話，通過斷裂面是應該很容易辯別清楚的。關於那個斷裂面到底能否確認，尚有待於研究者的報告。

○其它地区的玉琮

到新石器時代後期，除良渚文化以外，在中國各地都開始使用玉琮。

安徽潛山薛家崗遺址第三期的時間大致是和長江下游的崧澤文化崧澤Ⅱ期平行的，從而，那里出土

的玉琮應該早於良渚文化的玉琮，但薛家崗遺址第三期持續的時間可能晚於崧澤文化崧澤Ⅱ期，因此，第三期的遺物里很可能包含着屬於良渚文化早期的東西。

在江蘇海安青墩遺址採集的玉琮以及新沂花墟遺址出土的玉琮都是良渚式玉琮，由於良渚文化Ⅵ期與大汶口文化花墟期的時間相同（圖32），上述兩個遺址的玉琮的年代是很清楚的。山東茌平尚莊遺址出土的玉琮（圖33）屬於大汶口文化晚期向典型龍山文化初期的過渡階段，由於在花墟期，良渚式玉琮曾流傳到大汶口文化的分布地域，此玉琮可能就是由良渚式玉琮發展而來的。中國歷史博物館收藏的玉琮上刻有夬紋，這大概是得到良渚式玉琮的大汶口人把屬於自己集團的紋樣重新刻上去的。美國佛里爾美術館收藏的玉鐲上也刻有夬紋（圖37～1～3），這件玉鐲也應該是大汶口文化晚期的遺物，此玉鐲的介紹者林巳奈夫先生認為它是良渚文化的遺物，這個觀點是錯誤的。

湖南安鄉度家崗也出有玉琮（圖42），但正式報告還沒有發表，這件玉琮可能屬於屈家嶺文化或石家河文化。

屬於江西贛江流域樊城堆類型的幾個遺址也出有玉琮，但由於正式報告尚未發表，還不能作出判斷。

廣東石峽文化有四個遺址出有琮，這四個遺址分別是曲江石峽遺址，曲江床板樣遺址，封開鹿尾村遺址，海豐田壩圩遺址。這些琮的形狀和紋飾大致與良渚文化的玉琮類似，但其中有些石制的，上面還刻有雷紋等，因為雷紋在良渚文化未見，從而筆者認為，這不是由良渚文化流傳過去的琮，而是熟悉良渚文化玉琮的人在自己所在的地方仿制的。

山西襄汾陶寺遺址出土的玉琮屬於公元前二千年左右，其時間比良渚文化要晚得多，器形也相異，另外，從以陶器為主的其它遺物看，與良渚文化也沒有相同之處，至於時琮是一種特殊的玉器的認識，兩者是否有共同點，那為當別論。

陝西延安芦山峁村遺址出土的玉琮是否屬於新石器時代還不能作結論，但除琮以外的玉器以及石犁等，與陶寺遺址出土的同類器物十分相似，其年代很可能是屬於新石器時代晚期。這些玉琮刻有“饕餮紋”或“象徵獸面文”，從這一點看，與良渚文化的玉琮極相似，為什麼會出現這種情況到現在還是一個謎。

○結語

筆者在本文中力求以通過科學發掘的出土物為中心進行研究，因為博物館和美術館的收藏品不論具有多高的鑑賞價值，但對考古學來說，由於缺乏地層的証拠，很難對它作出正確的判斷，甚至還可能產生沒有根據的臆測。例如把玉琮作為男性的隨葬品這一點，如果不通過考古發掘，我們是想像不到的。

我們期待着隨着今後考古發掘的進展，能夠提供越來越多的資料，來豐富、充實我們對玉琮以及具有玉琮的那個社會的認識。

本文翻譯過程中，曾得到中國社會科學院考古研究所袁靖先生的指導與幫助，謹此致謝。